

赤穂の城主淺野内匠頭浪人堀部安兵衛武庸ご記し、紺緞子の立着、白山足袋、山鹿流の武者草鞋、南蠻鐵の小手脛當、一丈笹穂の槍を左手に提げ、不意に夫婦の目の前に現はれたから、夫婦はアツミ驚いて思はずそれへドツカミ尻餅つく、主「お助け……、南無阿彌陀佛……、安コレ……亭主、何も殺すこは云はない、安心しろ、乃公等が斯かる姿すがたなつたから定めし驚いたであらうが、何を隠さん我々は赤穂の浪人であつて、今回我々は亡君の御無念を晴さん爲め今夜吉良の屋敷へ乗り込み、上野介殿を討ち取るのだ、就ては仕度をする處がないから、當家をかり受けて、此の通り身仕度をした次第である、之より吉良家へ出張いたすのだが、當家へ決して迷惑はかけんから、安心してくれ、併し如何に主君の御爲おんためは申しながら、斯く當家を偽りしは相濟まぬ、之等の儀は宜しく推察して貰ひたい、又之れ迄着てゐた衣物は皆包の中へ入れて置いたから、後日高輪泉岳寺より受取りに參つた節何うか渡してくれ、又當家で斯様に

仕度も出来、乗込みの出来るこいふは此の上もない幸福である、左れば其の祝儀ぎとして、甚だ輕少であるが、此處に二十兩あるから、何うか受納して貰ひたい、吳々も當家には迷惑をかけんから、何うか此の金子を取つてくれ、ホンの禮の印であるしるし、いはれて夫婦はホツミ胸撫で卸し、主「へエ、左様でございますか、貴公方は忠義のお方に、計らぬ御縁でお宿をした私は、何んなに心嬉しいか知れませんが、迷惑處か、如何に難儀がかゝりませうとも、決して厭ふ處ではございませぬ、御ユツクリご御仕度遊ばしますやう、さういふお方は心づきませんで誠に失禮いたしました、先程も多分に御祝儀を頂いて居りますに、其の上斯んなに貰ひましては……、安「イヤ……、之れは納めてくれ、何うせ死に行く我々、有つて甲斐なき金であるから……モシ其方夫婦に志があつたら、死んだ後で線香の一本も手向けてくれるやう……サア受納してくれ、決して遠慮は無用である、主「へエ、それでは折角の思召し、頂戴いたし

て置きます、安「然らば、夜が明ける迄は、近處隣りへも決して他言はならぬ内聞ないもんにしてくれよ、主「それは大丈夫でございます、決して他言はいたしません、安「早速の承知せうち忝かたじけなくけない」此の時大高源吾おほたかげんごが降りて来て、源「オイ堀部ほりべ、太夫たいふよりの御催促ごせうそくである、支度しどが出来たら出立しゅつたつしやうこの仰おほせだ、早くしないか、安「ウム、承知せうちした、繰り出してくれ……」云つてゐる處へ、二階にかいよりゾロ／＼降りて来る大勢おほせいの浪士なうし、夫婦ふうふは目を丸くして見るこ、皆みな一様いっやうの扮装ひんさうにして、其の勇ましき姿すがたば心も自然しぜんに躍おどるばかり、處へ大石内藏おおいしくらのすけ之助のすけも降りて来て、内「只今ただいま、堀部ほりべから詳しく承うけたまはつたであらうが、我々われわれは亡君ぼうくんの仇あだを討つ爲ために、斯かく當家たうけを拜借はいしゃくいたしたのである、決して後あとに迷惑めいわくはかけんから安心あんしんしてくれるやう、亭てい「イエ、何なにういたしまして、只今ただいまも堀部ほりべ様に申上もうしあげます通り、手前方てまへがたは却かへつて響ひびれでございます、ナアニ迷惑めいわくがかゝたつて、怯ひびこもするんぢやアございませぬ、内「又後々またあとあと萬端ばんたん宜よろしく頼たのむ、亭てい「心得こころえましてございま

す……」一同どうどうが土間どまへ降りるこ亭主ていしゆは、亭てい「お暗くうございませ……」行燈あんどうかき立てさし出した、其の行燈あんどうに誰たれが書いたか、何なんのそのこ書いてある、大高源吾おほたかげんご之れを見て、ニツコリ笑わらひ、内「面白おもしろい、何なんのそのこは氣きに入いつた、イザ乃公それが門出かきでを祝しゆくさう……」帳場てうばにあつた硯引すいりひきよせ筆取ふでとつて、何なんのそのこ書いてある下したへ持つて行いつて岩いわをも通とほせ桑くはの弓ゆみを添そへ、

なんのその岩をも通せ桑の弓

源「何なにうだ、出来できたらう……」大石内藏おおいしくらのすけ之助のすけは莞爾にっことして、内「昔むかし、季封軍きふうぐんの故事こじ、虎こを見て石いしに立つ矢やの例たとしもあり、吉良上野介きちらこうづけのすけの首くびは、モウ手てに入いつたやうなものである」こ、ニツコリ笑わらふこ、一同どうどうも勇氣ゆうき加くははり勇いさみ立つ、折をりしも入江町いりねまちの四分早よんぶんはやの四ツの鐘かね、吉良の屋敷やしきへ討入うちいるは最屈強さいくつけうの時刻じこくなりこ、戸こを開あけ一同表どうをへ立ち出いでるこ、時は元祿十四年十二月十四日の夜よの月つき、一天四海てんてん四海澄すみ渡わたり、煌々こわくとして輝かがやく月は、恰あたも銀盤ぎんぱんを磨みがき澄すましたる如ごとく、地上ちやうに降つる白

雪は、皚々として、白氈を敷きたらん如くである、之より人数を二手に別ち、表門に二十三人、大石内藏之助之れを統べ、裏門にも二十三人、大石主税良金之れを牽ひ、山を呼べば川を答ふる合言葉、手筈悉く整ひ、正々堂々、本所松阪町吉良の屋敷へ乗り込んだ。

四二、時は來れり去良邸撃入り

時は元祿十五年十二月十四日の亥の刻過ぎ本所一ツ目手打蕎麥屋楠屋源兵衛方より乗り出した四十六士の面々は、表門には大石内藏之助良雄、裏門には大石主税良金、各々二十三人づゝ隊をなし、先づ表門の前に大石内藏之助は床机を据へさせ之れにかゝり、隣家本多孫太郎、土屋主税の兩家に届けを差出し、兼て用意の投梯子を表門の屋根に投げかけ、大高源吾、横川勘平兩人が、サラ／＼梯子に攀ぢ登る、先づ戰場なら一番乗横川勘平、二番乗り大高源吾名

乗る處だ、兩人は大屋根に上るこ、再び梯子を内部に投げかけ、之れを傳つてドン／＼降りかけたが、面倒なり身を躍らせて、女關先に飛び降り、砂利を踏み立てる物音に、門番は驚いて目を覺し、小窓を開けて見るこ、コハ如何に、一人は拔身の槍、一人は大槌を携さへ、突つ立つてゐる有様に、其の儘戸を開けて飛び出し、立關式臺に立上り、前面戸を打ち叩きながら、門「ヤア／＼お夜詰の方々、お廣番の衆達、怪しきものが入り込みて候、早々御用意に及ばれよ」こ、呼はる聲に大高源吾は、ズカ／＼近寄りさま、持つたる大槌振り上げて、エイツ、門番の頭上を發止こ打ち据へるこ、何かは以つて堪るべき、アツ／＼叫んで、其の場に倒れ氣絶した、残りの門番之れを見て周章狼狽逃けんこするを取つて押へ、勘「ヤイ、貴様騒ぐでないぞ、命丈けは助けてやるゆへ、門の鍵を出せ……」顛へながら門番は、門「宵にお詰衆に差出して私共の手許にはございませぬ、夜明け御開門の節受取るのぞございませぬ……」ブ

ル、聲で申立てる、偽りこも見へぬから、今は門を破るの外なし、大高源吾は大槌を構へ、ヤツミ振り上げ發止く、門を打ち据へる、錠前は飛び散つて、バリく、門が落ちた、之れが爲め門は八文字に開く、大石内藏之助は采配取つて振り立て、内ソレ乗り込めツ……」聲の下に一同の面々は下ツミばかりに繰り込んだ、此の時大石内藏之助は、表門の腕木へ陣太鼓を吊り下け、撥押つ取つて、トウく、ミ打ち鳴らす山鹿流の陣太鼓、十二陰陽切返し、法の叶ひ、其の響凛々として勇氣四邊を拂つて見へたりける、之れを聞いて一同も勇氣一層立ち誇り、口々に呼はりく、△「我こそは、故播州赤穂城主、浅野内匠頭の浪人、大石良雄以下四十七士の面々、故主の恨みを報ひん爲め、多年の辛苦を積み、時機漸やく熟して、今夜吉良殿の御首級を頂戴せんもの、推参せり、我と思はん人々は出遇へく」ミ、大音に呼び立てながら、大高源吾は眞先に、玄關正面杉の正目黒塗縁の前羅戸を大槌を以つて、ヤツミばかり

打ち破り、ドヤく、ミ踏み入らんこした時、中の方に寝てゐたのは上杉附人の一人、宮居新左衛門なり、此の物音聞くに等しく、ガバミ跳ね起き、襷鉢巻の仕度に及ぶ、一刀取つて現はれ出で、宮ヤアく、浅野の素浪人共推参なり、扶持に放れ祿を失ひ、物取り強盗の爲め押し入つたに覺へたり、一人も残らず槍玉に上げてくれん、観念せよや」ミ、ばかり一刀眞甲に振り冠り、喚き叫んで進んできた、此の時遅れ馳せに乗り込んで来た、横川勘平、大身の槍を捻つて、勘ヤアく、一番槍は横川勘平宗利なり……」ミ、名乗を上げ、出合頭に、新左衛門に涉り合ひ、二打ち三打ち、打ち合ひ突き合つたと思ふ、脆くも新左衛門槍を受け損じ、勘平が忠義の槍先の爲めに、グサミばかり突き通された、勘平は首かき落し、又もや一番首の名乗を上げる、これに勢ひを得た味方の面々は、我もく、ミ亂入する、此處で上杉附人の一人が第一に落命する、チヨイミ此處で述べて置くが、上杉の附人といふのは上杉の家來千坂兵部が、

内藏之助の舉動を探つた處、本心か表面か知らぬが、日夜遊興三昧、放埒に身を持ち崩してゐるこいふ注進にて、少しは安心したものゝ、ナカ／＼油斷が出来ないこ、ソコで、吉良上野介をば是非年内が來春には本國米澤へ送り、城内で隠さうこいふ事に決定した、併しそれ迄が安心が出来ないこいふので、當時名のある劍客者十八人を撰り出し、これを抱へ、吉良の邸内へ住居させ、隔晩交代に、宿直をさせる、之れを上杉の十八人附人こいふのだ、義士の面々は横川勘平が遅れ馳せに來て、第一に附人の一人宮居新左衛門を槍玉に揚げたのを見て、幸先好しこ、一度にドツこ奥へさして乗り込んだ、さて又裏門の方には大石主税良金を大將として吉田忠左衛門が後見役、惣勢二十三人、表門に太鼓の響くを相圖として、一同門に肉薄なし、大音聲に呼はり／＼、〇之れは故播州赤穂の城主淺野内匠頭の家來大石良雄を始め四十六人、主君の怨みを晴さん爲め、吉良殿の首級を頂戴に推参いたしたり、誰にても相手にならん、出合

へ／＼こ、呼はれる聲こ共に、富森助右衛門大榎を以つて、門をハツシ／＼こ打ち据へ、毀き破つて亂入する、猶も助右衛門は大榎を以つて、四方の壁又は戸を打ち碎いて廻る、之れを見て、味方一同はドツこ喚いて繰り込んだ、此の時寺坂吉右衛門、寺西彌太夫は、兼て用意の翕燈を二三ヶ處に點ける、折しも大石主税は吉田忠左衛門に打ち向ひ、大「吉田殿、之より貴殿に萬事のお指圖願ひたし、モウこれで拙者の役目は濟みました、此の上は後見の貴殿に萬事お任せ申さん、何卒指揮下さるやう……」こ、云つて采配を渡さうこするこ申「イヤ／＼、それには及び申さん、柀燈は二葉にして香ばし、こ申す、既に御身は父上より裏門の惣大將を命ぜられ居らるゝからは、飽迄采配取つて指圖をなさるが宜しい、ヨク／＼進退の掛引をいたされよ」主税は押し返し、大「某弱冠にして指揮などは逆も出來申さぬ、何卒貴殿が……」無理に忠左衛門に采配渡し、大「堀部氏、同道しやう……」主税は堀部安兵衛と共に、奥

殿さして進み入る、此の時物蔭より現はれた一人の武士、股立高く取り上げ、汗止の後鉢巻甲斐々しく、太刀振り被り大音聲、武「ヤア〜、浅野の瘦浪人、何百人來たるこも恐る、我ではないぞ、我は上杉附人の一人清水一角なりサア來い」こ、名乗りかけて堀部安兵衛に斬りかゝつた、安兵衛は一足飛び退り、安物々しや、不敵の大言、我こそは浅野の浪士堀部安兵衛武庸なり、イザ來い」こ、腕に覺への眞庭念流、一刀眞甲に振り被つて、ヤツこばかり打ち下す、二三合戦ふうち、素より天下に稀な堀部安兵衛の腕前、何條一角如きの及ぶべき、脆くも頭上より打ち下され、アツこばかり其の場へ倒れたが、一角の頭が三角になつた、安兵衛は其の儘に刺止もささず、奥の方へ進んで行く、之れ則ち裏門の一番首であつた、初めは表裏に別れてゐたが、それが今は奥深く踏み込んだから一處になり、各自に一刻も早く上野介の首級を上げんものこ、寢處へさして乗り込んだ、上杉の附人首め吉良の家來共は、瘦浪人等

に主人の首を挙げさせてなるものかこ、各々獅子奮迅の勇を現はし、義士の面々を喰ひこめ〜、此處を先途こ戦つた、處が此處に上杉附人の一人小林平八郎こ云へる豪のもの、其の夜は自分の小屋に引取つて寝てゐたが、俄に起る関の聲、婦女小供の泣き叫ぶ悲鳴の聲に、ガバミ匆ね起き、耳聳て、平「南無三モシヤ浅野浪人の亂入せしにはあらざるか、コハ容易ならざる一大事なり」こ直様身仕度に及び、大太刀を腰に打ち込み、バラ〜こ飛び出す途端、ヒュー〜、風を切つて飛んで來たは、半弓の矢であつた。

四三、浪士の奮闘入り其二

それに續いてバラ〜こ半弓を兩戸へ射かけるは、早見藤左衛門、潮田又之丞の兩人なり、大石内藏之助の命に依つて、卑怯には似たれど、門の脇の武士部屋より、多くの人が出て來ぬやう、大家根に上り、遠矢を射かけてゐるのだ、

小林平八郎心中に、平「サテは浪人共飛道具の用意ありご覺へたり、ヨーシ立
 關口へは行き難い、裏へ廻り、主君の寢處にかけつけ、腕の續かん限り、浪人
 共を相手に斬つて斬つて斬り廻り、我が腕前を見せて呉れん」こ、ソツこ臺處
 へ廻つて来た、幸ひ誰にも見咎められず、中奥迄進んで来た寺、傍へから飛び
 出した一人の男は大音揚げ、男「ヤア、其處へ来たつたるは吉良ごの、味
 内人ご覺へたり、我こそは淺野の浪人横川勘平宗利なり、忠義の切先受けて見
 よやツ……」躍りかゝるを平八郎物々しやこ、一足飛び退り、太刀眞甲に振
 り冠つて、平「瘦浪人の分際にして小面憎き一言、汝我名を聞いて腰を抜かす
 な、我こそは上杉附人の一人小林平八郎ご呼ぶ豪傑なり、イデ汝の細首打ち落
 してくれん」こ、大言を拂つて進んで来た、ソモ此の小林平八郎は當時有名な
 豪傑であつて、淺野家へも以前抱へられんこした事があつた人物であるから、
 横川勘平もヨク其の名は知つてゐる、勘「オ、コハヨキ敵御參なれ」こ、二三

合チャン、こ火花を散して斬り合つたが、素より勘平平八郎の太刀風に敵す
 べくもない、勘平既に危く見へたる處へ、潮田又之丞通りかゝり、助太刀せん
 こ打つてかゝる、處へ又もや赤垣源藏が通りかゝり、之れ又助太刀して小林
 平八郎に斬つてかゝつた、義士三人を相手に平八郎は少しも屈せず、前後左右
 に涉り合ひ、武術の極意を現はしての大奮戦、電光陽炎、水月こ、千變萬化の
 早業に、流石の三人も持ち餘してゐる處へ、駈けつけて来たは堀部彌兵衛金丸
 なり、今三人が只一人を相手に持て餘してゐるを見て、腑甲斐なく思つたか、
 利かぬ氣の老人だから大音に、彌「ヤア、一人に三人ごは何事ぞ、今の若い
 奴は弱虫で困る、乃公一人で其の敵を引受けるから一同は其處のけ……」
 七十に垂々こする老人が、大言を拂つたから潮田又之丞は、又「アイヤ老人、
 怪我でもあつては不可ない、其處退いたく危い……」彌兵衛これを聞
 いて大いに怒り、彌「黙れ、怪しからん事を申すな、假令七十が百になつても

忠義の志に變りはないぞ、又年寄つたればこて、若いものに劣るやうな彌兵衛金丸ではない、それよりは上野介殿の有家が未だに分らん、手間取つては一大事、若中の連中は疾く、隠居の有家を探せ……」云ひつゝ、寶藏院流覺への槍先鋭く、リウ／＼と扱いて突き出した、三人は強情爺の言葉に、餘義なく刀を引いて奥へこ進む、彌兵衛金丸の姿を見て平八郎は大喝一聲、平「ア老老の身こして、餘計の舉動片腹痛し、覺悟いたせ」こ、彌兵衛が突つかけて来る槍先を、平八郎身を開いて、切り込む太刀風に、彌兵衛の槍は中央よりバラリズンと斬り落された、アツと驚き、飛び退つた彌兵衛金丸は、素早く太刀引抜いて、カツシこ受け流し、二打ち三打ち遣り合ふうち、平八郎がヤツミ叫んで、切り込む太刀を彌兵衛受けは受けたが、少しく腰が挫けて、ヨロ／＼とシテ遣つたりこ平八郎、隙さず斬り込む太刀先を、彌兵衛受けんこして誤まつて廊下に迂り落ち、庭前へドーと倒れる、シテ遣つたりこ、笠にかゝつ

て拜み討ち、アワヤ彌兵衛の一命は風前の燈火の如く、危機一髪の其の折柄、横合より烈風の如く飛び込んで来た安兵衛武庸、エイミ叫ぶこ小林平八郎の右の腕をバラリズンと斬つて落した、アツミ叫ぶ處を、躍り込んで、肩先より乳の下かけて斬り下げたは天晴美事の腕前、彌兵衛老人起き上つて来て、彌「コレ／＼何をすのぢや、安父上お怪我はございせんか、お助太刀をいたしました、彌誰が助太刀してくれ云つた、安父上が既に危い場合なられたから……、彌何が危いのだ、其方も随分分らん奴ではないか、この彌兵衛には相手こして不足なれど、折角斬つてかゝつたものだから、老人の樂みにユル／＼料理してやらうと楽しんで、斬合央ばに、少し乃公は寝てゐたのを、横から切つて仕舞やアがつて……、怪しからん事だ、以來謹しめ、併しお蔭で腕が休まつた……」何處迄強情の老人だか分らない、安兵衛は苦笑ひをしてゐるこ何ういふ了簡か彌兵衛老人、突然、刀を抜いて小林の首を揚けたから

安父上、敵を打ち留め、首を取るなこは豫て太夫の命令で禁じてありませう。然るにナゼ斬り取られました、彌、大きに尤の言葉ではあるが、遠き慮りなき時は必らず近き憂いあり、首を擧げしは譯があるこゝ、後に相分る、それより早く其方は、上野介の寢處に乗り込み、他人に首をしてやられな、早く「急ぎ立てられ、安兵衛は刀を提げ、奥の間さして駆けて行く、處が彌兵衛が小林平八郎の首を斬り落したの、吉良上野介に面体格好がヨク似てゐるから、明日泉岳寺へ引揚げる跡より、上杉の追手が首を渡せ迫つて来るかも分らん、其の時平八郎の首を渡すこいふ老人の考へなのだ、處が安兵衛父に別れて奥へ乗り込み、ガラリ唐紙を開けるこ、バツミ立つた灰神樂眼口に入つて流石の安兵衛、タジ／＼後へ退る、途端何者こも知れず、安兵衛の向ふ脛を拂つて来た、安兵衛太刀風にそれこ知り、サツミ飛び上つて引外し、ヨク／＼見るこ、年の頃十二三になる少年、袂を結んで襷こし、後鉢巻、尻端折つて、

座敷の中に火鉢を五ツ六ツ寄せて、其の中へ手を突つ込み、人が来るこ灰を掴んで目潰しに投げ、小手下を潜つて来て向ふ脛を拂ふこいふ智勇兼備の少年だから安兵衛感心して、安コリヤ少年、貴様の姓名を名乗れ、乃公は淺野の浪人堀部安兵衛武庸さいふものだ、太刀先に向ふものは、狛猫たりこも、斬つて棄てよこは、頭梁の命令だ、貴様は少年だが、容赦をせぬぞ、併し健氣な働きに感じて一應名前を申せ聞いてやる」少年は怯めず臆せず、少「我は牧野俊齋」云つて、茶坊主ちやぞ、今年十三才、主君の御恩は老人でも少年でも同じ事だぞ、我が命のあらん限り、貴様の命は喰ひこめる、當お座敷は我が詰處一人たりこも通す事はならぬ、強つて通りたくば我を斬つて捨て、それから通れ……」云ふ事が感心だから安兵衛はニツコニ笑つて、安「貴様、身分の軽い少年でありながら、主君の御恩を忘れぬこは見揚けた奴、斬り倒すは易い事だが、弓矢の神へ對して恐れがある、依つて貴様こ一太刀二太刀合せてやる、

それで此の場を逃けて行けよ、假令逃けたら、貴様を不忠不義臆病腰拔は誰も申さぬ、サア速に此處を逃ける、逃けるさいふ言葉を忌むなら引揚げる切先を合した安兵衛、俊齋の軒込む刃二ツ三ツ、引拂つてやつて、ヤツミ刀の脊で頭を叩き、或は小手を打つ眞似して逃さうとするが、決死の覺悟をした俊齋、兩眼は血走り、更に逃げやうとしないのみならず、無闇に踏込んで来るから、怪我をさせるも可哀想、安兵衛は彼方此方へかわしてゐる、處が相手の安兵衛は六尺二寸の大男、俊齋は賢いから十三才でも小さい、十一二才にか見へない位の小兵だ、此の立合には安兵衛もナカク骨が折れる、中腰になつてゐるから、腰が痛い、流石の安兵衛も堪り兼ねて、ピタリそれへ座つて、安サア坊主、之れで貴様の脊を對々だ、之れで斬合つてやる、百萬の焚膺頂羽が、出て來ても怯さもしない乃公だが、貴様の爲には腕が疲れて汗が出るわい、早く此の場を逃けるわ……」云つてゐる處へ、サツミ障子を開けて、

駆け込んで來たのは武林唯七だ、ヒヨイミ見るに堀部安兵衛が座つて茶坊主相手に戯れてゐるから、武ヤア堀部ではないか、刀の及ぶ限りは狎猫たりとも斬つて棄てよこの大夫の御命令ではないか、假令少年たりとも妨げする奴は、斬り捨て、通るべきでないか、何故愚圖くしてゐるのだ……、堀ウム武林、乃公は強敵に出會つて持て余してゐるのだ、唯ナンでそんな小僧を……堀イヤ此の少年年は漸やく十三才、身分の軽い茶坊主ながら乃公を喰ひこめ目潰しをくれ、向ふ脛を拂ふ、之れ忠勇のものではないか、斬り捨てるは易い事だが、弓矢八幡の恐れ云ひ、殊に末頼母しき若年者、如何にも不憚であるから、據ろなく、利害を説き、或は威かしてこの場を逃がさうとしても、アノ通り兩眼血定り、少しも恐れず此の場を逃げやうとしないのだ、ダカラ乃公には斬り兼ねる……」竹林唯七之れを聞き兩眼に涙を浮べ、唯ウーム、勇ましい奴だな、乃公さてもその通りだ、然し何時迄も此處で相手にはして居

れん、依つて乃公が引受け、彼奴の眉間へ一つ傷をつけてやる、スルト或は血を見て恐れ逃げるか分らん、又成長の曉、其の傷が看板になつて、世間の人にも賞められ、出世の端緒となるかも知れん、マア乃公に任せろ、安成程妙だ、向ふ疵五百石、然らば貴様に任す、併し誤つて名刀の切先、殺して仕舞つてはならんぞ」いひつゝ、安兵衛はサツミ飛び退いた。

四四、堀部武林兩士奥殿へ斬り込む

中を隔て、武林唯七が、唯「ヤイ、貴様は仕合せ者だ、赤穂浪人堀部安兵衛、武林唯七兩人を喰ひこめるさあらば、貴様の名譽になる譯だ、サア早くこの場を引上げろ、末頼母しい奴の命を取るは如何にも不憚だから、助けてくれる……ソレ危い、ソレ怪我するな、チヨイ〜烈しく斬合ふ、小僧に恐れを抱かせて逃がさうと思ふが、小僧マス〜勢ひ盛んになつて斬りかゝつて来るか

ら、據なく唯七が後へ〜引退りながら、聽て切先で少年の右の頬にチヨイミ傷をつけるつもりで斬つた、處が刀は名に負ふ三尺余りの長劍、切先が余つて、咽元三寸ばかり斬りつけたから、堪らない、小僧の首はバタリミ落ちる唯七吃驚して、唯「アツ失策つた、南無三寶……これは……一落ちた首を取り上げて、附けて見たがモウ間に合はぬ、安兵衛大いに怒つて、安切つて棄てる位ひなら、貴様の力はかりぬぞ、貴様の腕なら過失はあるまいミ、この役目を頼んだに、小僧の命を取るミは何事だ、あたら美玉を石に當て、碎いたも同様だ、満らぬこミをするものだ、併し今更ら何んミいつたつて仕方がないミ、死体を敷物で包み、傍への床の上に置き安兵衛懐中より紙取り出して、何やら認め、死骸の傍に置いて、合掌禮拜してその場を立ち去つた、後に檢視の役人がこれを見るミ、小僧の最後の始末を一通り記してある、憫むべし堀部、武林兩人がこれを討取つて後、後悔の趣迄も詳しく認めてあるから、吉良の

家來二十六人、上杉の附人五人合せて三十一人が死んだ中で、牧野俊齋は尤も名譽の討死をしたことになつた、左れば名は万天の高きに揚り、未だに吉良の屋敷に夜討の繪三枚續きが世間にあるが、真中に小さな坊主が刀を揮つて赤穂浪士と闘つてゐる處が殊更記してある、全くこの時のこゝが後の世に残り、且つ牧野俊齋の殊勝な振舞を世間の人が認めてゐるからであつた、それはサテ置き、武林唯七堀部安兵衛兩人は、左右に分れて、ドン／＼奥殿さして乗り込んだ、此處に大石主税良金、今年十五才の若年ではあるが、兜の鍔を傾け、その勢ひ猛虎の如く、手に障るものを、血氣の勇に任せて、打ち拂ひ／＼、或は切り拂ひなごして、奥殿さして來るこゝ、此方の襖の中から、〇「ヤイ浪人推参なり、何奴なるぞ、無禮をするな……」怒鳴りながら陰刀を振り廻して切つてかゝる、主税は一足跡に飛び退つて見るこゝ、氣高き様子、併し身分は更に分らないから、主「我々は、赤穂浪士大石内藏之助の倅同苗主税良金である、御

身は何人にてござるか、御姓名を承はりたい……」尋ねたが、無禮者／＼こいふばかりで、無闇に切り込んで來る、主税は刀を振り上げて、上段下段こ切り結ぶ、隙やありけん主税が、ヤツミ一聲斬り込む切先き、相手の眉間へ二寸ばかり切りつけるこゝ、ハツミ驚き、今迄の勢は何處へやら、陰刀を投げ捨て、青くなつて逃けて行く、主「ヤア汚なし、何ゆへ逃けるか引返へして勝負／＼……」後に續いて追ひ込む横合より、不意に、△「己れ狼藉者、高貴の御方に向つて、無禮の舉動、其處動くな……」前に突つ立つたものがある、主税は飛び退つて、主「汝は何者だ、姓名を申せ……」、△「オ、耳の穴をさらへて、ヨック聞けよ、乃公は上杉家よりの附人添田孫四郎さいふ天下の大豪傑だ、今逃げられたは若殿左兵衛佐様であるぞ……」聞くより主税は雀躍りして残念がり、主「失策つた、サテは弱虫の若殿であつたか、この上は貴様を相手さしてくれん……」主税勢ひ込んで添田孫四郎に切つてかゝつた、上段

下段、一往一來ミ花火を散して切り結ぶ、そのうちダン／＼椽側より座敷に出で、遂に庭先に飛び降りた、雪は降り積り、月は牙へ、天地恰も白晝の如く、勝負をなすは最屈強ミ兩人勇氣を起して、激しく切り結ぶ、主税は十五才の若年だが、添田孫四郎は年將に三十に垂々ミする男盛り、主税は受太刀になつて追々後に下つて来るミ、庭に池があつて、池には氷が張つて、その上に雪が積つてゐる、去れば主税はこれを平地ミ心得て一足後に下る途端、足を迂らしてドスーン、氷を踏み砕いて、池へザブーンミ落ち込だ、主南無三、失策つた棒杭に左りの手をかけ、一刀を頭にかざし、飛び上らうとしたが、満身水に濡れ、殊に兩足を泥に突込んだから、容易に這い上るこゝが出来ない、そのうち添田孫四郎は、一刀を眞向に振り被つて、主税を一刀兩斷にせんミ身構へる、主税は棒杭の手を放して、跡に下るミ、ブツ／＼ミ水の中に沈んだ、折しも何處から飛んで来たが、ビューミ一筋の矢が羽響きして飛んで来て、添田孫四郎

の眉間の左りに突つ立つた、これにて孫四郎がタヂ／＼ミ、後に退るのを見て主税は池の中から、孫四郎目がけて横に拂つた一刀、添田孫四郎は胴切りミなつてそれへ倒れた、これは速見藤左衛門が、築山の上に突つ立つてゐて、モシも吉良の家來或は上野介が、堀越しに隣家にでも逃げ込むやうなこゝがあれば遠矢にかけて射倒しくれんミ弓に矢を番へ、庭先築山の上にて四方を見渡してゐた、スルトドブーンミいふ水音がしたから、ヒヨイミ築山の下を見るミ味方の印を着けもたのが池に落ちてゐて敵ミ思はしき者が、一刀を振り被つて池の端に立つてゐる、これを助けやうミいつても、急に驅けつけるこゝが出来ぬ、其處でその半弓の矢を狙ひを定めずして放つたのが、紛れ當りに添田孫四郎の眉間に當つたのだ、よい工合の紛れ當りがあつたもの、其處で主税は弓矢の神の守らせ給ふ處か、一時の危難を助かつて、その儘池より飛び上り、添田孫四郎の傍へ来て眉間の矢を抜取る、處へ速見藤左衛門が来たから、主税は厚

く禮をのべる、主「お陰で拙者一命を拾ひ、我が爲には再生の大恩人、棄てる命は惜まぬが、敵を打たないうちに、命を縮めるは本意ないこと、誠に忝けな

い仕合せ……」件の矢を返して、厚く禮を述べ、兩人にて、最前の場處に來て、薙刀を拾つて見るに、菊桐紋散しの黒漆の柄に、銀の蛭卷なしたる、三條小鍛治宗近の鍛へた立派な薙刀であつた、主「フ、ム、イヨ、これを持つたからには、若殿左兵衛督に相違なし残念なことでした……」彼方此方此行衛を探して見たが、更に知れないも道理、左兵衛督は椽の下に小さくなつて震へ上つてゐたのだ、去れば後に檢視が來て、父の大事を他所に見て遁れたといふので、所領を没収された上、信州高島へ流罪となつたは自業自得、後年眉間の傷が基で病死したさいふのも何かの因縁であらう、處が吉良の家來も赤穂の浪士に討たれるものばかりはない、何れも此處を先途に働き浪人を喰ひこめんとする、その働きはナカ〜美事、此處に矢頭衛門七といふ今年十七才の若

者があつた、身分は臺處賭頭、矢頭長七の伴であつて、今しも主税が功名を現はしたと聞いて自分も手柄をしたものだ、ズン〜奥へ向けて駆け込む折しも、衝立を小楯に取つた年頃六十に垂々とした老人が、一刀を提げて突つ立ち、兩眼を据へて立つてゐる、見るより衛門七は大音上げ、衛「ヤア、推参なり、我こそは淺野内匠頭の家來矢頭衛門七である、尋常に姓名を名乗つて勝負を決せよ」名乗りかけるに老人はカラ〜冷笑つて、老「アハ……、殊勝なる舉動かな、我は上杉の附人の一人たる和久半太夫なるわい……」聞いた衛門七驚いた、これは大變な敵に出合つた、その頃和久半太夫といへば名の聞へた神刀流劍術無双の達人、強い老人に出合つたとは思つたが、今さらそれでは廢さうともいへないから、眞正面より息をもつかず一刀振り被つて斬つてかゝつた、心得たりと半太夫、一打ち二打ち合せたが、隙の見へたか、エイと頭上より打ち下した一刀、衛門七の兜の眞甲を打つた、衛門七兩眼がグラ〜

して、氣が遠くなかつたが、勇氣を直して、又斬つてかゝる、半太夫これを見ても不思議に思つた、半「オヤツ、乃公が今兜の上から斬りつけたから、奴の鉢金を打ち割つたかと思ひの外、頭に傷がつかず無事とは不思議だ、己れ今一太刀試してやらう……」と、斬り込む衛門七の刀を右に拂ひのけ、一足前に踏ん込んで、又もや上段より片手打ちに斬りつけた、ピシッ、途端衛門七は足を迂らして、アツミ氣絶して俯伏しにドツミ倒れたきり、併し兜の頂きは異状がない、半太夫一人、不思議に心得て、小首を捻つてゐる處へ、駈けつけたのが横川勘平、赤垣源藏の兩人であつた、倒れた衛門七の上を飛び越し、兩人物をもいはず左右より斬つてかゝつた、大石内藏之助遙かにこの有様を見て、内「ソレ、衛門七を介抱せよ……」傍に居合せたもの兩人が来て、衛門七を引き起す、衛門七は突つ立ち上つて又もや半太夫に斬つてかゝらうとするのを、無理に引つ抱へるやうにして、大石の側につれて来る、内藏之助その鉢金

を見る、二太刀斬りつけた傷はあるが、その裏には通つてゐない、これは仔細があつてのこゝ、衛門七の父長助が昨年切腹して内匠頭に殉死をした時、その五臓六腑を兜の裏に塗りつけて、衛門七に渡した上、長「衛門七、貴様は若年なり、雖も、眞田幸村は十四才の初陣に功名を現はし、又小楠公を見よ、十才にて父正成に別れ、南朝無二の忠臣にて、楠家三代の譽を遺した、然らば汝は十五才だから元服の年であるによつて天晴功名手柄をして、潔よき名を萬代に揚げよ、又この兜は、先祖矢頭長右衛門が、朝鮮國迄被つて行つた譽れの兜である、年々上用干には取り出すがマダこれを着る時節が來なかつた、然るに今改めてこれを貴様に記念として遺す間、戰場に趣くは武士の本意、この度の模様によりこの兜を頂いて、天晴れ功名を現はす時節が到來するであらう、然し乃公は冥途の主君への御奉公に切腹して殉死、追腹を遂げる、決してく、悲しむな、その兜には乃公の魂が塗り込んであるから、假令何者に出合つて

も割られる心配更になし、影ながら貴様の身を守つてやる、一先づ冥途へ参り草葉の蔭から貴様の來るのを待つてゐるぞよ」こ、遺言して相果てた、サレば今夜の働き、衛門七は父の紀念の兜を頂き、吉良邸へ推参したのであつたから亡父の加護によつて、その身に異状がなかつたのであつた、それはサテ置き横川赤垣の兩人は、左右より秘術を盡して、半太夫に斬つてかゝるが、半太夫の勢がマス／＼盛んにして、陰に閉ぢ、陽に開き、千變万化の秘術を盡して斬り結ぶから兩人も扱ひ兼ねてゐる、處へ又もや、大石瀬左衛門、大高源吾、富森助右衛門のこれへ駈けつけ、兩人は入り換つて、半太夫を中に圍み、隙間も與へず斬り込んだ、處が半太夫の太刀先きがイヨ／＼烈しいから、瀬左衛門は右の肩先へ薄手を負ひ、富森助右衛門は左の太股を傷つけられ、大高源吾は右の耳の上を傷つけられ、これ又危ふく相見へた、處へドス／＼乗りつけて來たのが、不破數右衛門、潮田又之丞、貝賀彌左衛門、中村勘助の四人であつた

前の三人に換つて斬り込んだが、新手の四人も半太夫一人の爲に惱まされ、既に負色が見へて來た、處へ矢田五郎右衛門、村松三太夫、間瀬孫九郎、間重次郎同じく新六郎の五人がかゝつたが、これ又半太夫の爲めに打ち立てられる、半太夫は少しも屈せず、疊三疊を前に置いて、刀の刃先で敵を防ぐ勢ひは、一舉一動、一進一退法に叶つて、流石の義士も倦み果て、足はヨロ／＼、太刀先は亂れるこいふ光景であつた、折柄後れ馳せに驅けつけた、武林唯七はこの体を見るより、大音上げて、唯「ヤア／＼、大勢にて高の知れた敵一人に手間取るこは何事である、その敵は武林唯七が引き受けた、貴様等は速に立ち退いて奥へ参れ……」呼はつたから、大勢はこれをしをに、飛び退いた、唯七は正面より斬つて出で、唯「ヤイ、乃公は淺野の家來武林唯七猛の隆重である豫て噂に聞いた和久半太夫、イザ一太刀参らう」こ、身構へた、半太夫は莞爾こして、半「オ、柔しいこをいふものかな、貴様の名前も折々世間で聞いて

るる、相手に取つては不足だが我慢してやる、サア参れ」大言を拂ひ、太刀を上段に被つて身構へた、唯七も進みよつて刀をつける、一往一來、一上一下、飛鳥の如く立ち働き、龍を闘ひ、虎を猛り、暫らく勝負もつかなくつたが、唯七は半太夫の斬り込んで来る太刀先きの爲め、サツミ一足後へ退いた途端、足踏み交らし、ドシーン、後ろに倒れる、半太夫シテやつたりと、一刀振り被つて、唯七に斬りつけんとする、處が運の盡きかや半太夫の太刀が鴨居に斬り込んで、ポツキリ鰐元より折れた、半「ウーム、失策つた」その儘脇差に手をかけんとする、この時遅し唯七は、バツミ飛び起きさよ、横にエイと拂つた、流石の半太夫も受け損じた、右の脇腹より深く斬り込まれ、ドツカと倒れた、唯七はシテやつたりと、斬り込まんとしたが、半太夫の死骸の上にドーミ倒れる傍に見てゐた面々は慌て、唯七を助け起した、半太夫のまだ息のある様子を見て、唯七は素早く絶息を刺した、上杉の附人で、絶息を刺したのは和久半太夫

こ鳥居利右衛門ばかりであつて、他のものは皆斬り棄ててあつた、唯七半太夫の死體を敷物に包んで床の前に置き、唯この人容易く我等の手に討ち取れる人でない、これが我が刃に最後を遂けしは、全くこの人の運の盡きた証據である、然らば死體を踏み汚しては相成らぬ、弓矢の神の恐れあり」こ、いつて禮拜した、誠に義士の面々は神佛の守護があつたのであらう、これと同時に前原伊助の爲めに山吉新八郎は疊廊下で槍玉に揚げられた、處が此處に大石内藏之助は、庭前に篝火を焚かせ、采配取つて、味方の進退懸引きを指圖してゐる處へ、長槍を抱へた、一人の武士が、武「ヤア、浪士の隊長大石内藏助殿に見参せん、斯くいふ我は鳥居利右衛門なり」こ、呼はつた、内「心得たり」こ、内藏之助は身構へた、傍にあつた寺阪吉右衛門が躍り出やうとする、大石内藏之助は制止めて、内「コリヤ、無禮なこをいたすな、我を目指して名を名乗り、勝負を決せんこいふは勇士である、必らず其方等無禮の舉動あつてはな

らぬ」流石は大石、手槍追つ取つて鳥居利右衛門と渡り合つた。

四五、大石内藏之助鳥居利右衛門を討取る

大石内藏之助は智恵ばかりではない、槍術は佐分利流の名人だから、鳥居利右衛門と涉り合ひ、上段下段と突き合ふうち、遂に大石の腕前や勝りけん、鳥居利右衛門をそれへ突き倒し、その槍の柄へ

飛び込んで手にもたまらぬ霰かな

茅野三平記すに書いた紙を結びつけた、去れば泉岳寺四十七士の墓の中にも、茅野三平の墓はある、然し三平は討入りはしなかつた、これは忠義の爲めに故郷で切腹して相果てたから、大石内藏之助が義によつて斯ういふ取り扱ひをしたのだ、芝居でする早野勘平は茅野三平のこゝこであるが、一婦人の爲めにお家の騒動を他處に見て道行をしたり、果ては獵師となつて人々動物と間違つて殺

したり、又金を盗んだり、これが何も忠臣ではない、眞の茅野三平の最後はそのやうなものではなかつた、父の茅野三左衛門が頑固にして、仕方がないから三平は義の爲めに切腹して大石等に申譯をしたのであつた、その三平が死ぬる時に、飛び込んで手にもたまらぬ霰かなといふ辭世を讀んだ、豫て大石がこれを聞いてゐるから、大「彼は、志の正しいものである、その父が頑固にして我が子を殺せるは氣の毒千萬、彼の魂魄は宇宙に迷ふてゐるであらう」これが爲めワザ／＼内藏之助が鳥居利右衛門を討ち取つて、その功を茅野三平に譲つたのであつた、サテ吉良の家來二十六人、上杉の附人五人は残らず討取られたから、モウ邪魔する奴もなくなつた、内藏之助は豫て案内の爲めに備へて置いた繪圖面を以つて、上野介の居間へ乗り込んで見るこゝ、上野介は何時の間にか、その居間を立ち退いて行衛が知れない、手を夜具の中に差入れて見るこゝ冷へてゐる、この冷へてゐるのは余程早く何れへか姿を隠したものであらうこゝ、

これから部屋へ奥座敷へ、イロく上野介の在所を尋ね廻つたが、更に知れない、然るに此處に間重次郎は、廣庭の方から中庭の方へ廻つて見るこ、十四日の夜は明け離れて、十五日の早天のここへて、その寒さは肌を劈くばかりであつた、浪士の面々は上野介の在家を探し廻るばかりであるから、今迄の騒ぎに比べて、幾分か穏かになつた、月代は西の山に落ちんこする頃、寒さの強さに、槍を片手に突張つて、手袋を取つてはめんこ、我手に息をブーツミ吹つかけたが、それ位では更にこたへない、重次郎暫らくそれに茫然として突つ立つてゐるこ、一人の小武士がドタ／＼走つて来て、重次郎の片脇きより走り行かんこする、重次郎それを見るこ、矢庭に太刀引抜きさま、エイミ横に拂つたから、キヤツ、悲鳴を残して胴体二ツこなり、バタリそれへ倒れた、見るこ十五六才の前髪立ての少年だ、斬口より血がタラ／＼出る、その肌が幾分か暖かであるから、重次郎それへ足を當て、暖めた、斬られたものを炬燵の代りに

するこいふは大膽な話し、重次郎は足を暖めながら、この少年が何處から出て來たのであらうかこ、昵ミ足跡を見送るこ、庭の隅に白壁造りの土藏がある、これは今年新築の土藏だ、吉良上野介職分が職分であるから、諸家より高價の品の鑑定を頼まれる、二日も三日も預かつて置く、それを非常の節に藏ふ處がなくてはいけないこいふので、庭の隅へ白壁造りの土藏を建てたもので、出火の際などは火の粉や烟りを被つても、これには燃へつかぬやうに出来てある、それゆへ壁も頑丈なものではない、平生は何にも入れてないが、スハこいふ時に此處を立退き場所にしてある、今迄は浪士も此處に氣がつかかなかつたが、今重次郎は始めてそれこ知つたから、重待てよ、吉良上野介がこの白壁造りの中に隠れてゐるのかも分らぬ、ヨシ／＼思つたから、抜き足差足、土藏の傍によつて、昵ミ窺つて見るこ、果せるかな上野介は甲能平馬に吉澤求馬こいふ二人の小姓を連れて、此處に隠れてゐる、戸は引き戸になつてゐる上網戸にな

つて、外に土塀が建て廻してあるから、表からも見へなければ、内からも分らないが、ヒソ／＼話聲の聞へて、彈正／＼いふ聲が耳に入る、これは上野介の惣領の男子で、上杉公の養子となつてゐる上杉彈正綱則名乗つてゐる、萬一赤穂の浪人が討入つた節は、注進に行くものが出来てゐる、スルト上杉の人数がくり出し、援兵、後詰いふことになるから、赤穂浪人は一人も残らず討ち取つて仕舞ふことが出来る、その計略迄出来てゐるのに、まだ上杉から出兵がないから、彈正はこれを知らぬのであらうかといふので、上野介土藏の中で彈正／＼と氣を揉んでゐるのであつた、その聲が重次郎の耳に入つたから堪らない、重次郎は雀躍して喜んだ、間ウム、これは適切に吉良上野介に違ひない、ヨ／＼、これぞ天の與へである」こゝ、勇み立つた、この吉良の屋敷から上杉の屋敷へ注進に行くといふものがチャンと出来てゐる、それは赤穂の浪士が討ち入つてからは屋敷のものは逆も參るこゝは出来ないから、相生町に出入り

八百屋の甚兵衛といふものがある、これを吉良の用人添田孫四郎が金を握らせ、頼み込んだ、甚兵衛も金になるこゝだから、喜んで引き受け、それからいふもの毎夜／＼氣をつけて警戒する、處が丁度元禄十五年十二月十四日の夜中何たか表の方が騒々しく、こゝこゝありけの様子であるから、甚兵衛心に油断しない、甚占めた、テツキリ赤穂の浪人が吉良様のお屋敷へ亂入したのかも知れない、イヤ金儲けの蔓に有りついた」こゝ、大喜びて屋根の上に乗つて見るこゝ、吉良の邸内では大石が篝火を焚いてゐるから、バツと明く見へる、手に取るが如き屋敷の騒動、斯う高い處から見ると、ヨク聞へる、ガラ／＼と響く物音、女小供の泣叫ぶ聲を聞いて甚兵衛が、甚占め／＼、今夜こそは御利益が現はれて、豫てのお約束通り、五十兩五人扶持に有附いた」こゝ、ドン／＼二階から降りて来て、甚サア鼻喜べ、これから上杉様のお屋敷へ注進に行くんだ」こゝいつて着物を着かへ、草鞋をはいて、表に飛び出し、ドン／＼兩國の橋を渡つ

て、アレから米澤町に入らうといふ處に、前には寶葎張りの茶屋が列んでゐた。今しも甚兵衛がその茶屋の前にかゝつて來るこ、茶店の中から黒装束の武士二人、バラ／＼立ち現はれ、甚兵衛の腕首を突然ムツミ引攔み、□「ヤイ、我々は赤穂浪人警固のものだ、仇討ち引揚げ相濟む迄は、この橋の通行を許さぬ爲め、我々は當所を固めてゐるものだ、貴様は何處へ通るか、此處は決して通行を許さん、速に後へ引き戻せ」甚兵衛は驚いた、甚「ハイ／＼、誠にお手の廻つたところで、恐れ入ります、武「ナンダ、手の廻つたこは……、甚「イエナニ、私は稼業の用でこれから問屋迄參らねばなりません、武「フム、稼業ご申せば余義ないことであるが、其方の渡世は何んだ、甚「エ、擔ぎ八百屋でございます、武「これから、何處へ行く、甚「エ、問屋に買ひ出しに參ります、武「馬鹿をいへ、マダ宵の内だ、明け近くであれば兎に角、マダ九ツ前だ、夜中を買ひ出しに行くといふことがあるか、甚「それが、斯うでございます、お

出入り屋敷のお得意場で、明日精進料理を家料理せんければなりません處がございまして、今晚のうちに急に青物を買ひ出して貰ひたいといふ御注文を受けましたので、私は急いで參ります處でございます、武「さうだ、ダン／＼ここに聞いて見るこ、尤のやうではある、買出し先は何處だ、甚「エ、神田の連雀町でございます、武「神田連雀町へ行くものが、ナンで此處を遠廻りをして行く、甚「それは、手前が道を間違へましたので、これから柳原の方へ參らねばならぬのを、ツイ道を間違へましたので、へい、武「買出し先は何なんぞ申す、甚「エ、西村屋勘兵衛に申します、武「それでは、暫らく此方に待つて居れ」兩人が葎賣の中へ入つて、何か啖いてゐたが直ちに出て來て、武「よろしい、左様いふ譯であれば、問屋迄行け、尤も我々兩人が問屋迄見送つて遣はす、サア參れ、甚「へエ、それはマア御念の入つたことで恐れ入ります、道は毎日通つて居りますから、御案内には及びませぬ、武「素こより、

貴様を案内するのではない、貴様が果して問屋へ参るのであるか、我々が見届けるのだ、それを迷惑がる様子では、貴様は全く上杉へ行くのであらう、甚、
 イエ、さういたしまして、決して左様な……、さういふお疑いがあれば、是非に及びません、問尾迄御同道を願ひます……、「二人の武士は示し合せ、一人は甚兵衛を逃してならぬぞ、前後に氣をつけ、連雀町迄来た時には、モウ九ツ時になつてゐた、甚、これが西村尾でございます、此處迄参りましたら、貴公方のお疑ひも晴れましたでせうから、さうか御勘辨を願ひます、武、マアい、戸口を叩け、甚、ナンこいつて叩きませう、武、ナンこいつてもいゝから叩け……、「仕方がないから、甚兵衛戸口をトン／＼叩く、甚、エ、お頼み申します、今晚は……、「ドン／＼、若いものは皆二階に昇つて寝てゐる、奥には十四日の勘定を濟ませ、これから一杯飲んで主人の勘兵衛が寝やうこいふ處であつたが、戸口をトン／＼叩くから、勘、へい、何方で……、甚、

チヨイミ戸を開けて下さいまし、勘、夜更けになつて、何の御用か、お名前を仰しやつて下さいまし、甚、へエ、甚兵衛でございます、勘、只甚兵衛では分らねへ、この町内にも甚兵衛さういふ人はあるから、何處の甚兵衛さんだい、甚、本所の甚兵衛でございます、勘、ア、出商人の甚兵衛さんか、朝買出しに来る相生町の甚兵衛さんかい、甚、へい左様で……、勘、ナンダつて、今時分來なかつたのだい、余り早いぢやアないか、甚、さうか買ひ出しを願ひます、勘、オイ／＼、寢惚けらやア困るぜ、今漸々勘定の帳合を濟して、これから寢酒の一合も飲んで寢やうこいふ處なんだ、第一夜が明けなくつちやア市が立たねへ、市が立つてからお前來なせへ、それでなくつちやア相場が極らねへ、その癖お前は何日も市が立つてから、粗雑物ばかりを買つて行く男ぢやアねへかい、甚、マアさう仰しやらんで明けておくんなさいまし、武、コレ／＼、西村屋勘兵衛に申す青物屋、早く門を明けろ／＼、勘、ハテナ、聲が違ふぜ、合点

が行かん……」武、勘兵衛は抜き足して戸口へ参り、店の小窓を音のしないやうに明けて見るに、黒装束の武士が一人立つてゐるから、勘兵衛驚ろいて、勘「ウーム、それぢやア甚兵衛奴、強盗の案内をして來やアがつたな……」思つたから、ソツソ二階へ上つて寝てゐる若い者を起し、勘「相生町から來る甚兵衛老爺奴、押込強盗の案内をして來やアがつた、太い野郎だ」これを聞くに若い奴が皆飛び起きた、商人は「はいへ、この市場の男は、皆職人氣がある、若「さうもアノ甚兵衛老爺奴、平素から目付きが怪しいと思つてゐた、親方決して御心配にやア及びません、ようございませよ、モシ戸でも打ち壊して入つて來やアがつたら、搦はねへから殴りつけて仕舞ひます……」天秤棒、用心棒、三尺棒を各自に持ち、鉢巻をして騒ぎ立つ、この様子をそれぞ知つた件の武士は、武「コレくナゼ明けぬ、早々明けろ、廻り役人だぞ、御用だ、勘「ヤア、お廻りさままだ、お廻りなら驚くんぢやなかつたに……、只今明けます

……」西村屋勘兵衛土間に降りて來て潜戸をガラ／＼と明けるに、甚兵衛を連れてズイミ中に入り込み、跡をチャンミ締めさせて、武「其方が主人の勘兵衛に申すか、勘「へエ、勘兵衛は私でございます、武「其方は、この者を存じてゐるか、勘「へエ、これは毎朝買ひ出しに参ります甚兵衛に申すもので……、武「これ迄懇意のものか、勘「左様でございます、武「このものに少々不審の義があつて参つた、御用先きであるから、明日の朝五ツ半時迄其方に確に預ける、取り逃さぬやう大事にして預かつて置け、モシ取り逃すに貴様の宅の迷惑になるぞ、勘「へい／＼、信度お預り申し上げます」返答を聞いて武士はブイミ表に出て仕舞つた、その後で若いものが寄つてたかつて甚兵衛を縛り上げた、勘「ヤイ甚兵衛、年寄の癖に、手前は矢尻か何か切らうこいふ處を見付かつたんだらう、乃公の家に引き合をつけて太い畜生だ、平素から手前の目付きが氣に喰はねへと思つてたんだ、この野郎イケ太い老爺だ……」罵

り立て、擲く毆る、蹴る、甚兵衛はヒイ／＼いつてゐる、勘「アノお役人のいつたにやア、逃がすこ手前の宅が迷惑するご仰しやつたから夜の明ける迄、皆で此奴の周囲を取り巻いて居れ、乃公も一緒に起きて番をする、身動きでもしやアがつたら打ン毆つてやれ……」甚兵衛こそよい面の皮だ、身動きも出来ないやうにされて、夜の明ける迄皆で張り番だ、甚兵衛幾等泣言をいつても聞き入れない、そのうちに夜が明ける、表では市が立つが、西村屋では市を立てる譯に行かない、彼是れ四ツ小前になるこ、面体を頭巾で隠し、羽織袴の立派な武士が、家來を四五名つれて門口から這入つて來た、武「西村屋勘兵衛申すは當家か、勘へエ、手前が勘兵衛でございます、武「昨夜甚兵衛申す老人を預かつたであろう、勘へエ確かにお願い申しまして、アノ通り遁さぬやうに柱に確かり括つてございます、武「御用済に相成り、又お疑ひも晴れたから、差支へない、老人の縛めを解いて放してやれ、就ては其方稼業を休んでは

氣の毒であるから、手當として其方に二兩二分、若者四人に一兩遣はす……」いひつゝ、三兩二分の金を置いて武士はブイミ行つて仕舞つた。

四六、義士の討入り首尾よく本懐を達す

跡に勘共衛は喜んだ、勘「こりやア有難い、乃公が二兩二分に手前等が一步宛か、こりやア何んにしても有難い、甚共衛の繩を解いてやるがい……オイ甚兵衛さん誠に氣の毒だつたな、お前も災難だが、乃公の家も夜の明ける迄、マンジリも出來ねへで災難だつた、併しお前も悪いこゝを別にしたのぢやアねへミいふし、乃公の家でもこの通りお手當を頂いて誠に有難い、斯んなこゝア度々あつてもいゝよ、誰だい斯んなに甚兵衛を毆つたのは……、ウム乃公だつたか、マア甚兵衛さん勘辨してくんねへ……」甚兵衛這々の体で表へ飛び出したが、今更ら上杉の屋敷へ注進するこゝも出來ないから、ボンヤリ戻つ

て来るこ、吉良の屋敷は騒動の跡の祭り、上野介の首は何處かへ持つて行つて仕舞つたさいふことだ、それで甚兵衛は打たれ損、併しこの兩國の橋際に固めてゐた人は無名の人にしてあるが、實は藝州の淺野の自家の家來高橋一郎右衛門の手から出た人数であつたさいふことだ、これを吉良上野介は千阪兵部から聞いて知つてゐるから、彈正にまだ注進しないが、上杉からはまだ人数が繰り出さぬかと思つて、小姓の甲能兵馬に對つて、密に話してゐたのであつた、それを聞いた間重次郎は、早くも悟つた、重ウム、確かに吉良上野介に相違ないさ、思つたから、ヤツミ叫んで、土藏の中へ槍の穂先を突つ込んだ、その槍が吉良上野介の頬をかすつてヌツミ出たから上野介は我れ知らず、上アツ平馬、こりやさうぢや……」聲を上げた、途端重次郎は、襟につけてゐた呼子の笛を取つて、ピュー〜高く吹いたから、その聲を聞いて浪士の面々、バラ〜庭に立ち現はれ、口々に笛を吹き立てる、その音を聞きつけ、何れも

断けつけて来る、スルト間重次郎が隅の土藏に槍をかけてゐる、表庭、中庭は違ひ、塀が無双塀になつてゐるから、これを越へて来て見るこ、重次郎は大音揚げて、重、ヤア〜……各々、上野介殿はこのうちに隠れてゐるこ必定である、早く探せ〜……」ソレさいふこ土藏を八重十文字に取り巻いた大高源吾が大槌を以つてヤツミ土藏の戸を烈しく打つ、メリ〜、戸は倒れた、途端甲能平馬が、一刀揮り被つて飛び出した、不破數右衛門は突然、ヤツミ斬り倒した一人が翁燈を以つて中を探すこ、土藏の隅に上野介がブル〜震へて小さくなつてゐる、大石内藏之助それを見るこ傍によつて、内「我々は赤穂浪人でござる、君は上野介殿でござるか……」尋ねるこ、吉ウム、身は決して上野介ではない、内「アイヤ、我々の仲間にもお顔を見知りのものあり、お隠しあるな、モ早や遁れぬ場合、尋常に覺悟遊ばせ……」這葉優しく申込む、若手の面々は焦りにあせつて、或は腕首を掴んで引ズリ出し、或は

ブン殿らうごするものさへある、内藏之助はこれを制し、上野介を手車にのせて、その儘座敷に連れて来て、一同を奇麗に取り片付けさせ、敷物を敷いてその上に上野介を据へ、大石内藏之助は堀部安兵衛、吉田忠左衛門の二人を左右に従へ、上野介の前に進んで、言葉を改め、内「我々は播州赤穂の城主淺野内匠頭の家來大石内藏之助、これなるは堀部安兵衛、吉田忠左衛門でござる、主君内匠頭松の邸下の刃傷の後、田村左京太夫殿の邸内にて切腹、その際斯様く、我々は主君の無念を晴し奉らん爲め、千辛萬苦の甲斐あり、本夜本懐を達せんご推参いたしました、何卒尋常に御切腹ありたし」云、いつた時大石主税は、切腹刀を三寶にのせて上野介の前に押し直した、この時上野介は青息を吐きながら、目を細く開いて、切腹は否だ、さうか高野山に登つて剃髪をするから、命ばかりは助けてくれといつて泣きついた、實に臆病未練の人物で、大石等は呆れたが、再び口を極めて生害を勧めた、上野介はブルブル震へて更

に生害の模様が見へないから、堀部安兵衛は吉田忠左衛門と顔見合せ、安「大、夫、この上は是非がござらん、非常手段を用ひませう……、内「その非常手段を用ひなくないから、斯様に苦心をしてお勧めするのだ、少しも生害の模様がなないとは、御卑怯千萬……」これを聞くに次の間に控へてゐた若手の連中は、口々に騒ぎ立つた、大石内藏之助もモウ是非がないと思つたから、ズイコ上野介の傍により、胸倉をグイ取つて、大原眞守殿へ八寸三分の短刀を取るより早く、内「御免……」ブスリ突き立てた、上野介はアツツ叫んで七轉八倒の苦しみ、堀部安兵衛と吉田忠左衛門とが、左右より取つて押へてゐるから動くことも出来ない、鮮血はサツと迸り出る、内「これぞ主君のお怨みの籠つた短刀、今こそ思ひ知られよ……」いひつゝ、刀をキリノミ廻す、武林唯七早くも後ろに立つて、金剛兵衛盛高の一刀引抜き、ヤツミ一聲上野介の首を刎ねた、その首を直ちに用意の首桶に入れ、それへ直した上、亡君内匠頭に向

つて、このことを告げるこゝ、生ける人に物いふ如くであつた、居列ぶ面々は、何れも多年の本懐を達した嬉しさに、袖に涙を絞らぬものこそなかつた、それが濟むこゝ、間重次郎と武林唯七が件の首を守護して、吉良の屋敷を出て、大石内藏之助はこの時、采配を左右に振つて、内「エイ／＼」二聲かけるこゝ、四十余名は聲に應じて、皆「エイ／＼、オー／＼」こゝ、三度唱へる、関の聲を揚けたのは、元祿十五年十二月十五日の早天、東の空白み渡る頃であつた、實に會稽の耻辱を雪ぎ、不俱戴天の仇を報じた喜ばしさこゝ、何れも勇み立ち、隣家の兩家に届けをなした上、大石内藏之助は檢視役人が来た時ヨク目につくやうこゝ、女關にチャンミ届書を差し置き、臺所の火を見廻り、非常のないやうに戒しめ、一旦外した戸障子襖を締め、門番の縛めを解いてやり、鳥は飛んでも跡を濁すな、警への通り、庭前の篝火も消し、それに今夜用いた得物に、それ／＼所持人の名をつけて椽側に列べ、裏門の扉をしめ切り、何處迄も禮儀を亂

さず、吉良の屋敷へ禮をして引揚げたは、實に見揚げた有様であつた、それより回向院の寺内を借り受け、勢揃へをしやうとしたが、和尚が膽玉の小さい奴であつたから、寺内を貸してくれない、據なく元町の廣小路に勢揃ひをなし、此處より引揚げるこゝ、なつた、處がチヨイミ述べて置きたいこゝは、打入りの時は四十七人、實際は四十六人、然るに先に赤穂で評定をいたし、イヨ／＼仇討こゝこゝ決定連判狀へそれ／＼血判した人々は都合五十三人あつた、然るに討入りの時ぎうして四十七人に減つたかといふこゝ、連判狀へ署名した人々のうちで、岡野金右衛門は山科で頓死なし、山岡角兵衛は釣に行つて頓死をした、高田軍兵衛は切腹をして討入り前に相果て、小山田庄左衛門は變心をした、又奥野將監はナカ／＼の英傑で、若し内藏之助が失策つたら、二の矢を繼がうこゝいふ人物だから、打入りには加はらなかつた、それやこれやで四十七人に減つたのであつた、又茅野三平は前述べた通り、忠孝兩道に迫まられて攝州茅野郷

で切腹して相果てた、大石その志を憐んで、三平の遺志を全うさせたは、前に詳しく述べた通りであつた、又この外に淺野家盛んの時分、抱への醫者で、寺井玄溪こいふものがある、この人ナカノの忠義者で、さうか黨中に加はりたいこいふのを、大石がダンノ説いてこれを止めたが、この人後に本家藝州侯の抱へこなつて、内藏之助が江戸下りの際山科の浪宅を譲り受けたのはこの玄溪であつた、未だにこの寺井の子孫は京都に残つてゐるこのこころである、それはサテ置き四十七士の銘々は、辛苦に辛苦を重ね、首尾よく不俱戴天の仇たる吉良上野介を討取り、後々の始末手残りなく、手筈を整へ、イヨノ目出度く引揚げこなつた、討入りの時は表門から先に亂入したが、引揚げには裏門から出る、サテ銘々は名刺を座敷へ敷き散らす、これは押込み強盗ではなく、我々が乗り込んで來ましたこいふ証據にしたものだ、それから大槌一挺、繼梯子一挺、勝盛の白鞘、弓矢、槍長刀、十八品を床の間に飾つた、これが夜討の作

法だ、處で義士の一人早見藤左衛門は長屋の屋根に上り、半弓を引つめて大聲揚げ、藤「ヤアノ、吉良上野介の家來ヨク承はれ、我々は播州赤穂の城主淺野内匠頭長矩の家來、城代家老大石内藏之助良雄を始めまして、四十有余人主人の遺志を受け繼いで、今日只今吉良上野介義央の首を揚げたり、主人の仇を報ひんこ思ふものは速に來たつて尋常の勝負を決せよ、斯くいふ某は早見藤左衛門に申すものなり……」呼はつたが、誰一人向ふものはない、斯うしてイヨノ引揚げた、只引揚げこなるこ、追手の爲めに恐れて逃げたこいはれるから、早見に退口をやらせたので、戦場で引口こいふこ、ナカノ難かしいものだ、時に貝賀彌左衛門は懷中より手帳のやうなものを取り出して、名前を呼んで人數を改める、具「大石主税良金、主「オ……、具「吉田忠左衛門、吉「オ……、具「小野寺十内、十「オ……、具「富森助右衛門……、助「オ……、具「堀部安兵衛……」呼んだか返事がない、具「堀部安兵衛

「何處へ行つたう、安兵衛は……、堀部安兵衛く……」呼び立てる
 漸々のこゝで、安「オ……」返事をして出て来た、具「貴様は、何處へ行
 つてゐた、安「今チョット用場へ參つた、それで返事が出来なかつた……」
 大膽な男だ、徹夜しての働き、それで直ぐ用場へ行くといふのだから、人殺な
 んぞは朝飯町の仕事のやうに心得てゐる、此處で一同引揚げて、裏門へ歩つて
 来る、門番の縛めを解いて、義「コリヤ門番、門「ウンへ……、義「斯うい
 ふ時には得てして強盗や押込や物取りの這入るものぢや、ヨク門を締めて置け
 火の元を氣をつけろ、門「へエ、自分達がサンザ亂暴をして置いて、門を締め
 ろこは馬鹿くしい、大きにお世話だ……」こゝで、減らず口、義「無禮者奴斬
 り捨て、仕舞へ……」矢藤衛門七が抜打ちにヤツを拂つた、キヤツ、雉も鳴
 かずは撃たれまいものこゝはこのこゝだ、それから一同門を開けて引揚げ、回向
 院の門前迄歩つて来てドンくく、義「お願ひでござる、これは播州赤穂の

浪人大石内藏之助始め四十六人、今朝吉良上野介を討取り、只今泉岳寺へ引き
 揚げる途中、徹夜の働きに勞れもござれば、願はくば貴寺の境内をかり受け、
 暫らく休息いたしたく、この義方丈へ然るべくお取次を頼み入る……」門番
 慌て、奥へ取次ぐ、暫らく經つて門番は、門「誠にお氣の毒ながら、お貸し申
 すこゝは出来ません、本院は開帳に相撲の外、貸すこゝは出来ないといふ掟に
 なつて居りますから、遺憾ながら、お断り申します」こゝで、謝絶された、これは
 掛合を恐れて住持が断つたのだ、内藏之助はモシ上杉より追手でも掛つた時は
 回向院の境内で、快よく勝負をいたし、萬一討死をするも寺の境内なれば、武
 士の本意と思ひ、此寺で暫らく休息をいたさうと思つたが、貸さぬこゝあらば強
 いて借らなくてもよいから、静々兩國橋にかゝつて来るこゝ、溜屋重兵衛といふ
 酒屋がある、この酒店へ出入りしてゐる倉橋傳助、又木綿屋をしてゐた前原伊
 助、この兩人が心易いので、兩「イヤ各々、此處に居酒屋があるが、一献息繼

をしては……」一同それよかろう溜屋の前へ歩つて来るに、商人のここだから、朝は早い、重兵衛は醬油樽を臺にして、暖簾をかけてゐる、伊御亭主お早う……」重兵衛振り向きもしないで、重皆さんお早よう」こ、答へてゐるへ一同はドカ／＼溜屋の店に入り込む、茅野和助は徒の男だから、槍の先へ生首を突通した奴を重兵衛の目の前にヌツミ出して、和重兵衛さん、お早よう……」重兵衛強盗だミ早合点をして、重ウーム、私の處は表を張つて居りましたも、お金はございませんが、何なりとも思召のものがあらばお持ち下さい、命ばかりはお助けなさつて下さいまし」青くなつていつたから、和助思はず吹出して、和アハ……、亭主、我々は左様なものではない、昨夜斯様／＼である、主人の敵討をいたし、只今泉岳寺へ引揚げるのだ、咽喉が咽いて仕方がない、一杯飲ましてくれ……」聞いて漸やく安心した見へ、亭主左様でございますか、それは／＼、お目出度いここで……、皆々様も嘸

マア御満足でいらつしやいませう、サア／＼召上つて下さるやう……」快よく酒樽の鏡を抜いてそれへ出す、一同大いに喜び、榊やら茶碗やらで、グビ／＼飲んだが、實に甘露の味がある、ホロ／＼酔つた富森助右衛門は、俳名を春帆こいつたが、矢立を取り出して、

水鳥の毛はむしらるゝ行衛かな

こやつた、大高源吾がこれを見て、源拙者も一句仕らう」こ、サラ／＼書いたのが、

山を抜く力も折れて松の雪

神崎與五郎が傍にゐるが、神乃公も、一句仕らう」

世の人の道し分けずば遅くとも

積る雪にぞ踏迷ふべき

聽て源吾は懐中より金三兩出して、亭主に與へ、此處を立ち出で、淡雪こいふ

茶漬屋の前へ来たときには、見物は狭小路へ山の如く、敵討を見ろく、ワイく集まつて来る、此處に雪の中へ密柑を廣げて居つたのが、岡野金右衛門の仲間國藏さいふものだ、國皆様、お目出度う存じます、兼々御大望の様子存じて居りましたゆへ、昨夜は見へ隠れにお供をいたし、お手柄は残らず拜見いたしました、殿様にも嘸かしお喜びでございませう、粗末の品ではございますが、さうか召し上られまするやうに、密柑を出す、面々これは結構だ、取つて食ふ、此處で一同は手紙を認め、或は何々を何處へ届けてくれ、この手紙は何處の誰にやつてくれ、國藏に頼み込み、紀念の品をやる。

四七 義士の引揚げ武士道の龜鏝

難なく一同は兩國橋にさしかつた、折柄向ふより、馬上で乗りつけて来たのが旗本服部市郎左衛門さいつて、當年二十七才の若武士であつた、十六桁の

定紋のついた袴、六七人の供を従へ、それへさしてか、つて来たが、不圖見ると、火事装束をして槍の穂先を白木綿にて包み、五六十人一隊となり、行列を正して進んで来る様子、供のものは屹驚してゐる、それを見るに市郎左衛門は槍の穂先を拂ひ、馬上に構へて大音聲、市「アイヤ、何者なるか、天下のお膝元も辨へず、異様の装束をいたし、隊伍を組んで御府内に入らんとする奇怪の者共、この橋は一人たりも通すこと能りならぬ、退れッ」大喝する、赤垣、不破の兩人は先に立つてゐるが、赤ナニ、生意氣なことを申す奴だ、その義なれば我々の手並を見せてくれん、轟き立つを、大石内藏之助は押しこめ、内「扣へろ、天下のお旗本に對して、無禮いたさば一大事である」、制しながら兜頭巾を岡野金右衛門に持たせ、謹んで馬の傍に進み、内「これは故淺野内匠頭の家來共にして、昨夜仇敵たる吉良上野介の邸に亂入いたし、首尾よく本懐相遂げ、只今主人菩提所なる芝高輪の泉岳寺へ引揚げの途中でござ

つて、決して公儀へ對し、粗忽の舉動は仕りませぬ、何卒武士のお情けを以つて、お見廻しあり、この橋をお通し下し置かれまするやう、願ひ上げまする服部市郎左衛門これを聞くに、殆んど感心して、市「それは嘸かし御満足でござらう、年來の鬱憤を晴らされ内匠頭殿の御靈魂も定めし喜ばれるであらう、武士の忠義いふものは左様ありたいものぢやが、併しこの橋は、恐れ多くも千代田の城の御立關先ゆへ、外の橋と違つて、御橋といふ、斯く各々が武器を携へ、異様の扮装をいたしては、この橋通行は適ひますまい、君に仕へるは誰しも同じこゝ、拙者一身に代へても、君のお爲めに、この御橋を守らねばならぬ、又各々方もこの橋を通らねば、芝へ行くべき道のない譯でもござるまい、差圖はいたさぬが、深川より永代の橋を渡り、江戸の外れを通行すれば、別にお咎めはあるまい、御邊等は忠誠の武士なれば、篤に分別いたされよ」謂はれて内藏之助は、内「仰せ御尤千萬、然らば後詰より繰引にいたし、永代橋を通

行仕りますれば、御安神下さるやう、併し御貴殿の只今のお詞、日頃のお心掛けの程も慕はしう存じますれば、何卒御姓名をお聞かせ下されたし、市「イヤ、拙者は旗本の一人にて、名前を名乗るほどのものではこれなく、この義は容赦に預かりたい」こゝ、いひ捨て、右に左りに分れた、かくて大石内藏之助は道をかへて、一ツ目の橋へかかり、永代橋へやつて来た時、村松喜兵衛は、村「赤垣く、貴様の腰にブラ下けてゐるものはソレは何んだい、赤「これがこれは翁燈提灯だ、アハ……、モウ提灯の必要もあるまい」取り外し、川の中へザブンと投げ込んだ、その翁燈が丁度加藤遠江守の家來が乗り込んでゐる舟の中へ落ちた、何んであらうと拾つて見るに、提灯に播州赤穂の臣赤垣源藏重賢と記してある、これが豫州大洲の加藤家に遺り、代々寶物となつて傳はつた、それから青海橋から元四日市、高橋より中の橋を通つて、今の入舟町に來る、此處が井伊掃部頭の屋敷、その前に來るに、足輕の飯田惣助、バラく、

「ご駈け出し、飯「コレく、異様の風体をして何處へ参るものか、有体に申立
 てい、この分には通すことは出来ない」ミ、喰ひこめた、内藏之助それへ進み
 出で、内「我々は、斯様くのもの、決して狼藉を働くものではござらん、依
 つてお通し下さるやう、願ひたい、飯「さやうでござるか、それは近頃お羨ま
 しい御忠義でござるが、拙者のお役が相立ちませんによつて、役頭櫻井源右衛
 門へ申上げた上で、御返答いたしませう、暫らくお控へ下さい……」直ちに
 このことを櫻井源右衛門に傳へる、この人は誠にさうも決断のない人だ、さう
 せよごもいはない、留守だといつてゐる、惣助役に立たん人だと思つたが仕方
 がない、内藏之助の前に来て、飯「各々方には、誠に御氣の毒だが、辻番の裏
 をお通り下されたい、この表を通られては、私しの役目が相立ちませんから、
 見て見ぬふりをいたして置きます……」内藏之助は然らば御免蒙むるさいつ
 て、辻番の裏の溝の上へ板を並べて、屋根の下になつて炭俵を置いたり何かし

てある物置同様、これを惣助がスツカリ片付けて、飯「サア、お通り遊ばせ」
 ミ、いふその扱ひ方がナカク、足輕には珍らしい、後に大石が細川越中守の屋
 敷へ預けられた時、この話をしたから、惣助は百石の知行を頂いて侍分ミな
 つた、サテ義士の面々は此處を通つて、築地の青物町にかゝつて来た、その時
 分酒井靱負の屋敷ミなつてゐるが、これが舊淺野の屋敷で、去年三月この屋敷
 から、登城になつて、松の廊下の騒ぎになつたのだから、鬼をも挫ぐ義士の面
 々も、流石に名残を惜み、△磯貝、アレアノ三ツ目の長屋、アレが貴公の住
 居であつたのであらう、磯「ウム、實にさうも懐かしい」ミ、立ち去り兼ねる
 体、大石内藏之助も涙にくれて、門番につき、内「サテ我々は、元淺野家の臣
 共でござるが、昨夜仇敵吉良上野介殿の御首級を頂戴して、只今泉岳寺へ引揚
 げる途中、御門前を通りかゝり、誠に懐かしく、一同立ち去り兼ねますれば、
 何卒お女關を拜見いたしたうござる」ミ、頼み込む、門番はこのことを上村御

酒之丞に申入れらるゝ、酒一尤千萬、苦しうない、開門して案内しろ」に、許しが出る、一同喜悅んで、女關へ歩つて来て、昔床しき建物、只何んもなく戀しく、暫らくは茫然たる有様、これが女關の見納めか、一同はスゴく立ち退く、内藏之助は御酒之丞へ厚く禮をのべ、靜に邸内を出た、御酒之丞はこのことを殿様へ申上げる、殿御酒之丞、ヨク計らつた、忠臣を遇するの道に適ふ其方の扱ひ一同もさぞ喜んだであらう、褒美として五百石の加増を申付けらるゝ……」女關先丈け見せて五百石だから、御殿迄見せたら千石は大丈夫であつたかも知れぬ、その次には協阪の門前にかゝつて来た、内藏之助が浪人した時、一番先に抱へやうと申込んだのは協阪家であつた、その時は亡君三周忌濟み次第、お召に従ひますといつて斷りをいふて置いた、今門前を通行するに、黙つてゐては武士の本意に違ふといふので、門番所に參り、内一拙者は、元播州赤穂の浪人大石内藏之助にてござる、先にお召しに預り、有難く、その節は

亡君三周忌相濟み次第、お招きに應ずべく申上げて置きましたは、亡君の仇を討たん存念にこれあり、今日本懐を達し、御門前を通行いたしに付き、一寸御挨拶として置り出でました、何卒この儀お取次ぎ願ひたい……」スルトこれは御念の入つたる御挨拶、取次を以つて太守より賞美に預り、それより一同は芝口三丁目の仙臺公の屋敷迄やつて来た、スルト足輕日野榮馬が喰ひこめた、このことを詠つた川柳に、

大手柄雀の辻で鷹を止め

これは仙臺が竹に雀の紋處、淺野は鷹の羽の打ち違ひであるからいつたのだ、仙臺の先祖淺野の先祖は、朝鮮征伐の時に大層仲が悪かつた、それゆへ分家の淺野家に今回の騒動があつて、田村右京大夫の邸内へ預けられた、田村は仙臺の分家ゆへ、大變本家と本家の争いを苦にして、殊には淺野内匠頭を庭前で切腹させたのは、兩家不和の爲めだ、世上でははれるのを大變心配してゐる

た、それゆへ今曉淺野の家來が四十余名、仇討を遂げて、今此處へ來たさいふので、成丈け丁寧にして遣はせさいふ命が下つた、それが爲め柴田九郎次も忍ぶ藤太さいふものを、門前に出迎ひさせ、九是非、チヨイミお立ち寄りをお願いしたい、白湯一つなり召上り、ユル／＼御休息下さるやう一ミ、申し込んだ、一同断りもいへず、内「然らばお言葉に甘へ、御厄介に相成り申す……」皆々立關先へ入る、木戸を開けて、座敷の椽側へズーツミ薄縁を敷いて、面々それへ腰をかける、柴田九郎次は、衣服を改め、麻上下を着してそれへ出で、内藏之助に面會いたし、挨拶終つて後、九サテ、各々方は武士は忠義を以つて第一の心得とする、御身等一同昨夕のお働きこそ、後世武士の手本でござる、甚だ卒爾ながら、各々方昨夜よりのお働き、一入御空腹ミ存せられる、白湯一つ召上れよ、又警固の爲め家中のものを以つて、それ／＼手配りいたしたれば追手の憂ひは決してござらん、モシ万一のこごもござらば、當家にてお引受け

申すに依つて、御心配なく、ユル／＼御休息下さるやう一ミ、挨拶する、一同安心して白湯を馳走になる、そうこうするうちに粥を煮て出す鄭重の取持ち、内藏之助は柴田九郎次に向つて、内「思ひがけなき御深切の御介抱に預り、お禮の申し述べやうもござらん、命さへこれあらば、他日御報恩の時もこれあらんかなれぎ、冥土へ急ぐ身の上、今生の御面會もこれ限り、御前様へよろしくお執成し願ひ申す……」厚く禮を述べる、九御鄭寧の御挨拶痛み入る、サテお見受け申せば、手負の方も御老年の方もある様子、昨夜からの御働き、定めしお勞れであらうによつて、乗物の用意を申付けませう……」これを聞いた堀部彌兵衛金丸は嘲笑つて、彌「拙者は當年七十六才でござれご、昨夜の働き位ひでは、別に勞れも思ひ申さず、コレこの通り……」駒留の石をボンミ蹴る、石は堀の中へドブーンミ、音がして落ち込んだが、これが仙臺家では駒留石を抜いたさいふこごである、サテ吉田忠左衛門、富森助右衛門の兩人を

以つて、愛宕下に屋敷のある目付け仙石伯耆守へこのこゝを届けに及んだ、然るに話は後へ戻つて富森助右衛門の女房いふは、加藤越中守の家來菅内記いふ人の娘でお直いふ、助右衛門の妻になつて二人の間に六才になる長太郎いふ子がある、然るに助右衛門赤穂離散の後、お直い伴長太郎は菅内記の處へ厄介になつてゐるが、助右衛門更に寄りつかない、毎日何處かへ出かけては晩になつても歸らないこゝがある、内記も變だと思つてゐる、丁度十二月十四日の朝、助右衛門ヒヨツコリ菅の屋敷へ戻つて来たが、長太郎は永の病氣でスツカリ瘦せて骨皮ばかり、助右衛門はこれが今生の別れだと思ふから長太郎を膝に抱き上げて、富お父さんが國から歸つて来たによつて、確かしてゐるがよい、何か求めたいものはないか、エ、買ひたいものはないか………」小供は頑是ないから、長「モウ直にお正月になるから、紙鳶が欲しい助「ナニ紙鳶、ヨシ／＼買つてやる………」助右衛門思はず涙を流し、思ひに

沈んでゐる、處へ内記が出て来た、内「ヤア富森ヨク戻つて来た、助「これは舅ぎのには、誠にさうも御厄介を相かけ、相済みません、今度奉公済の話が極つて、今相談に取りかゝつて居ります、直も長太郎も今暫らくお世話を願ひ上げます、内「それは承知したが、余り度々家を明けるから、女心でも心配する、外に圍者でも出来たのではないか、女は女、馬鹿なこゝに心配する、長太郎も斯うやつて、寝てゐてもお前のこゝをいはぬ日こゝてはない、助「ハイ、分つて居ります、何分共によろしくお頼み申す………」他處ながら父子の別れ助右衛門は涙を流して出立した、スルト十五日の朝、内記は何心なく供を一人連れて、久保町へかゝつて来る、向ふの方で火事だ／＼騒いでゐるが、火は更に見へない、そのうちに血汐に染つた富森助右衛門、吉田忠左衛門の兩人が歩つて来る、バツタリ内記に出會つた、内「ヤア助右衛門ではないか、助「オ、お舅御殿か、内「さうした譯ぢや、助「よい處でお目にかゝりました、昨

夜は斯様くでござつた」こ、言葉短かく物語り、助「これより仙石殿お屋敷へ届け出で、一同芝高輪泉岳寺へ引揚げますれば、お上の御作法により、軽く切腹重くて打首、最う御面會も今日限り、お直ごの間柄もこれ迄のこご、お諦め下さるやう願ひたい」聞いた内記はハタご小膝を打つて、内「ウーム、豪い出来した、斯ういふ勇ましい聲を持つたは内記の果報、娘の仕合せ、併し長太郎も病氣のこご、何かな話もあらうほごにチヨイご宅迄立ち寄つてはくれまいか、助「ハイ、忝けないそのお言葉、これは吉田忠左衛門ご申す方、同志のものでござる、我々義士は異身同体、今大切なお届を濟ませ、一同亡君の御前へ参る心得、私一人、女房子の愛に引かされたごいはるゝも心苦しきこごなれば、恣い二人に逢はない方が返つてよろしからんご存じます、立派な挨拶、内記も強てごもいひかね、その儘別れたが、後に細川へ預けられてから、富森助右衛門が頻りに心配氣に俯向いてゐる、細川家に於ては義士の願ひは皆々聞き

届けるごいふこごで、何なりご遠慮なう申置くやうご再三の尋ねであつた。

四八、泉岳寺の焼香、首の受取書

この時富森助右衛門は思ひ切つて、富實は拙者には長太郎ご申す倅かごござる昨日某は倅に紙鳶を買つてやるご申してゐたが、その儘に相成つて居ります、モシ買つてやらない時は倅を欺くに當つて、親ごして子を欺くは人情に欠けるこご、存じ、これが心にかゝつて居ります……」細川公は笑つて、細「それは何より安いこごである、早速予が求めて遣はすであらう……」即日大きい紙鳶を買いて届けさせた、スルト助右衛門は大いに喜び、快よく切腹したごいふこごである、サテ一同は仙臺の屋敷を立ち出で、濱松町一丁目にかゝつて来た此處に伊勢屋茂兵衛ごいふ葉茶屋がある、この家の三才の子供を女中が脊負つて見物してゐる、村松三太夫何心なく、三「オ、いゝ子ぢや、一寸私に借さな

いか、女「イエ、これは御主人のお子でございます、村主人の子でもい、チヨイミ借しな……」無理に抱き取つてエイく愛して行く、三太夫には三才になる子供があつて、他人の子を見て、我子のこころを思ひ出すのは當然な話し、小供はニコく笑つて行く、女中は慌て、家へかけ込み、女「旦那様大變なこころが出来ました、旦那様を連れて行かれました、旦那様が連れて行つた、女「お武士の連中が……、主「それは大變だ」こ、伊勢屋の亭主驅けつけて村松三太夫の袂に縋り、小供を貰つた、三太夫も氣の毒に思つて、何か取らせやうと思つたが、別にやるものがないから、腰に帯びてゐた呼子の笛を與へたが、この子が成人の後は、義士の年回のある毎に、必ず世話人になつて盡力をしたさいふこころである、それより一同は田町二丁目にかゝつて来るこ、家主忠兵衛いふ者、木戸を閉めて通さない、若侍の面々は、△「ナニ、家主風情の分際にして、通さんには何事だ、ソレ踏み潰せ……」

袴くを大石はこれを制し、丁寧にあ挨拶して、内「只今我々のこころについて、仙石様へ届け濟のこころであるから決して家主の落度とは相成るまい、安心して通してくれ、人質一人差置くであらう……」こ、千葉三郎兵衛を残して置いて打ち通る、家主忠兵衛は右の趣を丹羽遠江守の屋敷へ届け出る、この時既に仙石伯耆守へ吉田、富森の兩人が届出てゐるから、通行差支へなしこのこころ、依つて千葉三郎兵衛も直様泉岳寺へ乗り込む、このこころがあつてからの、この辻番所へ六尺棒や手取繩を備へて置くやうになつたのであつたが、町人ながら忠兵衛いふ奴も豪い處がある、この時越後浪人關根彌次郎いふものが、怪我人へ乗物を三挺くれる、ソコで義士の面々はソロくこ引揚げて來たのが芝高輪泉岳寺の門前であつた、内藏之助は扇子を取出して、沖の小舟を招いた沖にかゝつて一同の來るを待つてゐたのは武林唯七、間重次郎の兩人、これは眞物の上野介の首を持つて、品川沖に待つてゐたので、合圖によつて舟を漕ぎ

よせ、亡君の墓前に吉良の首を手向けるこいふこころになつてゐる、内藏之助は泉岳寺の住職酬山大和尚に對面いたし、仇討の始末を物語るこ、サア一山の僧徒達は力味出した、□モシ上杉より追手來らば、我々より打ち果して呉れんこ、各自に得手の用意をして、坊主頭に鉢巻、それから門をピタリ締める、内藏之助は上野介の首を洗つて、浅野内匠頭の墓前に供へる、今に首洗ひ井戸こいふのがあつた、義士一同はズーツミ列を正して座る、皆々下俯向いて、涙を流して喜んでゐる、聽て内藏之助は進み出で、去年内匠頭切腹の際用ひた短刀を取出し、三度首を打つ眞似をして、冷光院殿の尊靈へ手向け、懐中より取り出したる祭文を恭々しく讀み上げる、祭文は此處に略することにして、義士一同は皆々涙に暮れてゐる、内藏之助より焼香を始め、一同焼香が終るこ、酬山和尚も立ち出で、酬各々御本望を達せられ、さぞく御祝着ならん、先づ寛いで御休息いたされよ」挨拶する、役僧の案内につれて、庭へ通る、ズーツミ筵

を敷いて、その周圍を屏風で圍つてある、一同その中へ入る、△「オイ、村松、住職は變な扱いをするな、我々を座敷へ通さないで、庭へ筵を敷いて屏風を立て、その中へ放り込むこは酷ひぢやアないか」こ、いつて怪しんでゐる、内藏之助これ聞いて、内各々、騒ぐでない、これが陣中で用ゆる處の源家古流の埋火こいふ馳走ぢや、これは地を掘つてその中へ炭火を入れ、薬灰をかけてその上へ又土を盛つたので、埋火こいふ大層な馳走である……」一同は成程こ思つて感心してゐるこ、そのうちに白湯が出る、粥が出る、残る限なき鄭重の扱ひ、一同休息してゐる、これは細川越中守の家來で當時浪人してゐる、目良田佐仲こいふ人が、丁度寺に滞在してゐたので、その指圖によつて、斯様な馳走が出来たのであつた、内藏之助それこ知つて、佐仲に面會を申込んだが同じ浪人でも貴公方は主君の仇討をいたし、後世迄も武士の鑑こなるべき立派の働をいたされたが、拙者は身に落度あつて浪人いたし、何の手柄もなく、

當山に蟄居の身の上である、お耻かしくて御面會は出来ないといつて謝絶して會はなかつた、後に内藏之助が細川へ預けられた時、この話をしたので、目良田佐仲の歸參が適つたといふことである、この時何か門前が騒がしい、ガヤ／＼いふから一同は立ち上り、〇「儲は上杉から討手の人数が来たに相違あるまい」ミ、力味立つ、スルト斯は如何に、乗物が一挺門前に下りる、然もそれが女乗物だ、静々立ち出でたはの年頃二十五六才の女であつた、女「妾は松平安藝守より參つたもので、内藏之助殿に面會いたしたし……」ミ、申入れる、門を開けて通し、内藏之助對面するミ、女「サテ内藏之助の、妾は淺野御本家松平安藝守家中曾根の局に申すもの、殿のお仰せつけに依り、御代參に偽り罷り出でたるは外ならず、各々には昨夜御本望を遂げさせられ、天晴武士の譽れ、御主君様にも御満足に思召し候はんが、正しく上野介殿の御首級を討取られたるや、御主君にもお心が、りなれば、何卒首級一覽いたしたう存じまする

内「委細承知仕りました、只今御覽に入れませう……」内藏之助は床机にかゝる、左りの方に小野寺十内、右の方に堀部安兵衛、内藏之助の後ろには、午の年のもを撰み、付林唯七、弓に矢を番へて構へる、堀部彌兵衛は軍配の代りに、扇子を開いて、八方に眼を配る、一同のものは皆折敷いて、四方を堅め、内藏之助は、左りの手に扇をつき、右の手を刀の柄にかけて身構へする、大高源吾はそれへ立ち出で、首桶の前に進み、靜かに蓋を拂つて、傍らに置き、上野介の首級へは、左右の兩手共人指指で目を押へ、拊指を耳につけ、曾根の局の前に差し出す、局は女ながらも首實檢の古式を心得てゐる見へ、扇を取出して、半ば開き、五間目の骨の間から、首級を見る、その上に鬘櫛を以つて惣髪を分け、傷跡をしかみ見届け、少し下つて平伏なし、會如何にも上野介の首級に相違ございませぬ、サテ各々方は、千辛萬苦の甲斐あつて、今日この首級を冷光院殿の御前に手向けるといふは、さぞ／＼亡君に於かせられましたも

御満足に思召すでございませう、妾は片時も早く歸館の上、この趣き御主人へ申上げるここにいたしませう」この時彌兵衛は右の手に扇を上げて、彌「エイ……」と、聲をかける、一同は、皆「オ……」と、返へす、エーオ……、くく、こ三度関を揚げる、これを勝関といつて、昔し戦ひに勝つた時は、先づお目出度う存じます、左り扇でございませうございませう、この勝関から出たものである、又女の首實檢といふは、我國では曾根局が始まりであつた、ソコで實檢も濟み、局は駕籠で歸る、サテ江戸市中では今にも戦いが始まるかのやうに噂をしてゐる、十五日朝になつて届けにより、大目付けお目付けが檢視にして出張になる、ダンく調べる、吉良上野介の首がない、吉良の家來では左右田孫兵衛に齋藤宮内の兩人であつた、役「アイヤ兩人、内藏之助等亂入の次第はそれく口上書にいたして差上ぐべく、又取り糺すことあり、上野介の首はさうした、宮「大方、内藏之助等でも持ち参りましたものさ心得まする、役「

コレく其方共は何んだ……、宮「へエ……、役「二本差したる武士が、主人の首を取られるのを知らずにあるさいふことがあるか、宮「へエ……、恐れ入りました……」ソコく檢視も濟む、後で大變、兎も角も首のない吊いは出來ない、これから菩提寺の牛込の萬松院へこの趣を、頼む同山より回向院へ依頼し、回向院より泉岳寺を経て、その首級を貰ひたいと申込む、役僧の獅子一呑といふものが、それは手向の濟んだ首だから實は持つて行つて貰ひたいのだが、寺から寺へその首を遣はすさいふ譯にはいかんが、吉良家より當山に向けて、貰ひたいさいふなら遣はさうさいふ挨拶、余義なく左右田孫兵衛に齋藤宮内の兩人が罷り出る、依つて、一呑の計らひで、受取を一通お出しなさいといはれ、兩人は仕方なく受取を書いた、

受取申一札の事

一音

壹個

右は主人吉良上野介殿御音級お渡しに相成り確に受取申候爲後日音受取の証仍如件

元祿十五年十二月十五日

吉良左兵衛御内
左右田孫兵衛
齋藤宮内

泉岳寺様

これで始めて葬式が出来た、珍らしい受取証もあつたもの、世間ではこれを評判して、その時の地口に、

嫌ふなよ音納豆の歳暮もの

又は、

少將の音を小桶に打ち入れて

寺より寺へ送る初もの

斯んな悪口を吐かれた吉良上野介は、随分死耻を洒したものであつた。

四九、義士の四家預け、内藏之助十八ヶ條申開き

義士の面々は仙石伯耆守の案内によつて、大目付役宅迄連れられた、何れも出迎ひ、これが他の罪人とは違つて、主君の爲めに仇を報じた人々であるから、扱ひも到れり盡せりであつた、聽て一同は廣間に通され、謹んで命を待つ、其處で命令が下つた、細川越中守へ十七人、毛利甲斐守へ十人、松平隠岐守へ九人、水野監物へ九人、四家へ分けて預けこなつた、世にこれを淺野浪人四家預けと稱へる、今その人数を列擧するに、細川家預けの分が、

大石内藏之助、片岡源吾右衛門、原惣右衛門、
間瀬久太夫、吉田忠左衛門、小野寺十内、

奥田孫太夫、
 富森助右衛門、
 矢田五郎右衛門、
 磯貝十郎左衛門、
 堀部彌兵衛、
 早見藤左衛門、
 近松勘六、
 大石瀨左衛門、
 堀部安兵衛、
 中村勘助、
 千葉三郎兵衛、
 貝賀彌左衛門、
 堀部數右衛門、
 大高源吾、
 吉田澤右衛門、
 武林唯七、
 杉野重平次、
 堀部安兵衛、
 不破數右衛門、
 菅谷半之丞、
 木村岡右衛門、
 岡野金右衛門、
 松平隱岐守預けの分が、
 岡嶋八十右衛門、
 村松喜兵衛、
 大石主税、
 毛利甲斐守預けの分が、

間新六、
 勝田新左衛門、
 前原伊助、
 水野監物預けの分が、
 問重次郎、
 神崎與五郎、
 三木次郎左衛門、
 奥田定右衛門、
 間瀬孫九郎、
 茅野和助、
 村松三太夫、
 矢藤衛門七、
 横川勘平、
 以上如くであつたが、然し如何に忠義に逸りしこはいへ、天下の法度を破つたものであるから、その儘には濟まされない、公儀ではそれ／＼評定の結果、元禄十六年正月廿日に到つて、大目付仙石伯耆守より御奉書を以つて、大石内藏之助に尋ねの義あり、越中守家來差添へにて、土屋相撲守役宅迄罷り出づべく、尤も御登城前ゆへ、六ツ時召つれ罷り出づべき沙汰があつた、處で二十一日六ツ時、大石内藏之助は麻上下を着し、土屋の女關に罷り出た、尤も大石には細川の才物澤村才八郎がつき添ひであつた、土屋の家來堀小右衛門といふが

出迎ひ、兩人を使者の間へ案内した、公用人高橋傳藏がそれへ立ち出で、傳
 拙者は高橋傳藏である、大石内藏之助を渡さるゝやうにこの時澤村才八郎は、
 才手前は主人より命ぜられ、大石内藏之助の附添ひでござれば、是非共御評
 定の席迄附き添ひ申したいに、申込んだ、高橋傳藏は自分の一存にて決する
 譯に参らんから、一旦席を立つ、これは細川越中守の萬事行き届いたやり方で
 自分が預かつてゐる大石内藏之助に万一間違ひがあつては預かつてゐる甲斐が
 ないに、澤村才八郎へワザく申付けたのであつた、處で評定の席さいふは隨
 分嚴かなものであつた、
 老中では、

- 甲州矢村三萬石
- 武州忍十萬石
- 下總關宿七萬五千石

- 秋元但馬番任
- 安部豊後正武
- 戸田山城守忠正

若年寄では、
 常州土浦七萬五千石
 武州岩槻五萬七千石

越後高田十萬三千石
 下野壬生二萬五千石
 武州高坂一萬石
 下總藤牧一萬石

寺社奉行では、
 丹波龜山五萬石
 下野烏山三萬石
 豊後杵築三萬五千石
 攝州尼ヶ崎四萬八千石

- | | | |
|------|-------|-----|
| 青松永井 | 本米加稻 | 小土 |
| 山平井上 | 多倉藤葉 | 笠原屋 |
| 下志伊大 | 伯丹越丹 | 佐相 |
| 野摩賀和 | 耆後の中後 | 渡撲 |
| 守守守守 | 守守守守 | 守守 |
| 幸直尙正 | 正昌明正 | 長正 |
| 明之富通 | 永忠英通 | 重直 |

大目附は、

仙石伯耆守

町奉行では、

松前伊豆守

御勘定奉行は、

井戸對馬守

御目付では、

甲斐庄喜左衛門

天野傳四郎

水野小左衛門

御側御川人では、

武州川越九萬四千石

安藤筑後守

河口攝津守

荻原近江守

布多施孫兵衛

多門傳八郎

柳澤出羽守保明

上州高崎五萬五千石

松平右京大夫輝久

ソコで掛り主人が小笠原佐渡守であつた、この人が正面に席を占め、その脇には祐筆松平兵庫が御川箱を控へてゐる、又吉良家よりは参考人として、家來近藤角右衛門、吉田仙右衛門、高家同役品川豊前守は家來附添ひ、これ又出頭する、大石内藏之助は澤村才八郎附き添ひ、麻上下を着し控へる、一同席定まるを見濟し、小笠原佐渡守は嚴然として大音に、佐々コレ兵庫、内藏之助へ簡條書讀み聞かすべし……」松平兵庫は心得て、簡條書を取上げ、サツミ開いて高らかに讀み上げたが、その文意は

- 一、此度淺野内匠頭家來、大石内藏之助頭取仕り、多人數徒黨いたし、主人の存念を承け繼ぎ、仇討に申唱へ、吉良上野介屋敷へ推參に及び、狼藉の振舞不届の到りに候事
- 一、一度御法により、御裁許相成り候義を、お膝元も憚からず、亂暴

を働き、公儀を恐れざる致し方、不届至極の事

一、夜中に忍び入り相働き候條盜賊に等しきいたし方、不届の事

一、第一火事厳しき江戸表に於いて、一同火事装束着用いたし候條、法外の事

一、天下の格式定められ置き候御法を辨へず、上野介の屋敷表門を破り押込み候段、不届の事

一、夜中押入り候ゆへ、火を持参いたし候義は勿論、松火なるや、提灯なるや、明かに言上いたすべき事

一、長道具持参いたし相働き候段、法外なる事

一、鳴物を持参し、御法度を辨へざるいたし方、不届の事

一、采配を以つて、多人數を掛引いたし候條、軍儀に近きいたし方、一揆に類する事

一、吉良上野に恨みありとも、左兵衛督に手負ひさせたる段、父子共に討取るべき心底なりしや

一、内匠頭家來に覺しきもの數百名四方を固め、上野介屋敷へは、一間々つぎ拔身の槍三本づゝを以つて相固め候由、是等の者は何れへ立ち退き候や、包まず申上ぐべき事

一、陪臣の身を顧みず、高家の職たる上野宅へ押込み、思ひの儘の振舞、多數を討取り候段、公儀を恐れず不届の事

一、上野介屋敷の様子、萬事案内の由、定めし手引のものこれあるべく、明白に申上ぐべき事

一、去年四月中赤穂引拂ひの節、心底一物あつて多人數を集め、言を左右に托し、上野介を討取り、亂を招く様子、赤穂退散の首尾、公儀に對し、深き存念あるや害少なからず、一々申上ぐべき事

佐右の條々相尋ねる申譯あるや、さうぢや……」これぞ十八ヶ條の質問であつた、大石内藏之助はこれを聞くに、悠然としてそれへ平伏なし、兩手を支いて少しく膝を進めた。

五〇、武士道の精華、義士の辭世及び切腹

大石内藏之助は静々顔を上げ、内「お尋ねの義一々お答へ仕りまする、佐然らば尋ねるが、其方始め内匠頭家來共、徒黨いたし、仇討ご申し唱へ、吉良屋敷へ推參に及ぶ、徒黨のならぬこは存じ居らうが、内「内匠頭譜代の臣にして、亡君存生中より、年寄り上席を汚し居りますれば、頭取の儀は今般に限らず、併し徒黨ではございませぬ、佐「五十人に近き同勢はこれ徒黨でないといへまい、内「恐れながら四十余人の者は、内匠頭家來のみにございませぬ、モシ荷負の小者たりとも、他のものを交へますれば、或は徒黨ご申すかも存じ

ませぬ……」この時傍にあつた土屋相摸守が、内匠頭家來が今回仇討をしたのを快よく思つてゐるから、土「秋元氏、成程これは徒黨ごは申されまい、秋「如何にも、徒黨ではござるまい」小笠原佐渡守は同席二人が徒黨でないといふので、自分が強いていひ張る譯に行かないから、佐「然らばお膝元を憚らず、一度裁許相濟みしものを破りしはさうぢや、内「お膝元を憚らずこのお言葉でございまするが、上野殿御用心深く、上杉家へお越し相成り候こ度々、その節は討ち奉られず、お膝元を憚り遠慮いたしました、依ては吉良殿お屋敷は、本所隅田川を越へ、葛飾郡のこゝで、以前は下總、お膝元を憚りますれば、これへ趣きましてございまする、土「秋元氏、何んぞ尤でばござらぬか武藏下總の國境、兩國橋を越へれば下總でござるに依つて……、秋「左様く、こりや内藏之助はお膝元を憚かつて、左様いたしましたものに相違ございませぬ、土屋相摸守が内藏之助の言葉を助けるに、秋元但馬守も左様く相違

を打つ、小笠原佐渡守も同席にさういふ者があるから、押していふ譯に行かぬ
 佐「然らば、尋常に参るべきに、夜中盜賊に等しきいたし方、卑怯ではないか
 内「エ、お尋ねの義には候へども、相手は高家のお歴々、殊に上杉家の附人も
 これあるやに承知仕つれり、浪人の身分にて、尋常に推参いたさば、ここらな
 らざるは必定、討ち洩しなば、亡君への恐れ、殊に小を以つて大を討つは夜攻
 めに如かず、昔の教へを守り、討入りましてございます、且つ盜賊に等しか
 らざるやう、御隣家等へ皆お断り申し置きました、お問ひ下されなば、相分り
 ますでございます、佐「非常第一に厳しき江戸に、火事製束を着して、往來い
 たせしはさうぢや、内「五十人に近き人数ゆへ、非常第一の強風、依つては火
 事製束を着いたしましたは、余程心を用ひたる私の考へでございます、即ち火
 事製束に火を消す道具と存じ着せましてございます、土「秋元殿、火事製束
 は火を消す節用ゆるもの、成程大石の心がけ感心ではござらぬか、
 秋「左様

く、如何にも尤でございます、小「然らば、夜討の砌り、差添へて長道具を持
 参いたせしはさうぢや、内「召連れましたる同勢が、皆覺へのものばかりでござ
 ざいます、高家は歴々なり、附人も腕前達したる由、併し長道具は持参いたし
 ませぬ、師父の教へにも、九尺は槍、二間は長柄と思ひ居ります、尤も武器は
 數多けれども、四千八百五十四器のうち、長道具は如何なものか、後學の爲め
 拜見いたしたうございます「これは佐渡守の尋ね方の悪いのではなく、奥祐筆
 の書き誤りであるが、内藏之助が斯様答へたから、バツと迫つた、スルト土屋
 相摸守が、土「秋元殿、長道具は用いますまいなア、秋「左様でございますらう……
 兩人がこれを消して仕舞つた、小笠原佐渡守は少し急ぎ込んで、佐「高家に格
 式の定めあるに、上野介表門を破り、亂入いたせしは心得あつてのここか、
 内「恐れながら、表門の大切なるここは固より心得て居ります、依つて梯子を
 架け、塀を乗り越へましてございます、佐「イヤ、屋敷檢分の折、表裏の門を

開けてあつたは、これ如何に……、内「これは右夜討の節、騒ぎに紛れ込み盗賊なきの這入らぬやうに、人数のうちより、手分けをいたし、代るく相守り居りました、然るに吉良の御家來のうちに、己れ門を破り逃げたる者がございました、併し逃ける者には目をかくるなご、いひつけ置きましたゆへ、その儘になつて居りましたるものご相見へます、佐討入りの節は夜中のここのゆへ、火を持参いたしたるは勿論なるべし、松火なるや、蠟燭なるや、申上げよ、内「恐れながら、十四日は月夜にて前日より降り積りましたる雪明りを幸ひ、蠟燭を燭臺に點じ用ひましてございます、佐其方々申開きいたせごも陪臣の身を以つて、高家の歴々へ對して自儘の振舞ひ、公儀を恐れざるいたし方、罪科は遁れぬぞ、内「恐れながら尊命の通り、高家へ對し陪臣の身を以つて、自儘の振舞ひ、その罪勿論深しご雖も、君へ仕へる者の身ごいたしては、仇敵ご見倣しまする以上は、高家は愚か、國主藩主たりごも、これを討取りま

するが、臣たる者の勤かご存じまする……、土「これは尤ぢや、賞めて然るべきものぢや」ご、仰しやつた、重ねて小笠原公が、佐其方のいふ處、天晴法を辨へたる如くなるが、飛道具はナゼ持参いたした、内「飛道具のお尋ねなれご、鐵砲は相用ひませぬ、半弓は持参仕りましたが、吉良殿モシ早走りの術あつて、塀をのり越へ御隣家へでも驅せ入りましたは、猶々の騒ぎご心得まして、五挺用ひし譯でございませぬ、且つ上野介殿を討洩しましては、亡君のお怒りを増すの道理、依つて半弓は持参いたしましてございませぬ、佐討入りの節浪人の身分を以つて、采配にて下知掛引をいたし、一揆に等しきいたし方、この嚴めしき振舞はごうぢや、内「采配を用ひましたは、備中の水野谷出羽守の城取の節、主人より采配を預り、名代を勤めたるごごこれあり、その時より、采配を預りし儘にございませぬば、これを用ひましてございませぬ、只一揆に等しきごは嚴めしきお尋ねにございませぬ、佐其方は萬事

に心を用ひたやう申開くが、翌朝屋敷を檢分の節、手槍、半弓、梯子等を取り落し参りしは、余程狼狽して引揚げたやうであるが、それはご命が惜しくば、ナゼ仇討をいたせしぞ、内「恐れながら、昔の書に、夜討夜攻め、夜軍に打ち勝ちなば、敵の陣へ味方の印しの附いた物を置いて参るが、武門の常にございます、周章して取り落せしこのお尋ねは、お情けなく存じ奉つります、太平の政事にはお馴れ遊ばされても、武道のここはお心掛けこれなきやも存ぜられます……」これは全くのここで、夜討の軍に勝つて、悠々引揚げるときは何か味方の印物を置いて歸るのが法だ、それを知らないで尋ねたから、大石から一本参られ、大きに赤面した、土屋相摸守はこれを聞いて、クス／＼と笑ふ小笠原佐渡守怒りを含んで、言葉激しく、佐「上野介に恨みあつて、佐兵衛督迄討取る心組みなりしか、内「イヤ、上野介様ばかりでございます、佐「然らばナゼ佐兵衛督に傷を負はした、内「恐れながら、夜討の節、四十七人に申付

けましたには逃ぐる者は斬るな、向ふものは據なく討取れ……然るに名乗る間もなく、薙刀を以つて岡嶋八十右衛門に斬りつけましたれば、それゆへ岡嶋が僅の傷を負はせしに逃げ出しましたので、御親子共を討つ心底は聊かもございませぬ、佐「討入の節、數百人が上野屋敷を取圍み、一間毎に槍三本つゝにて相守りいたさういふ、引揚の砌、右人數は何方へ行かれしか、具さに申せ……」内「藏之助これには返答が出来ない、多分本家藝州公よりか、左もなくば池田立蕃の方から人數を出したものと思ふから、それゆへこれは有体にいふここが出来ぬ、唯頭を下けてゐるばかり、スルト附添の澤村才八郎が進み出で才「恐れながら、申上げますが、臆病の眼には白鷺も旗に見へ、波打つ音も関の聲に聞ゆるもの、降り積りました雪が解けて流れ落ちましたのが、夜中の風に氷つたのを見て、槍に見違へたものも存じまず、氷柱に相違ないやう心得ます、
 □「恐れながら吉良の家來近村半左衛門、喜田仙右衛門申上げます、氷柱

は氷柱、槍は槍ご相分ります、確に槍でございました「スルト土屋相摸守が、
 士「秋元殿、氷柱に相違ございませんなア、氷柱だく、氷柱に相違ない」こ
 れよりイロく尋問があつたが、内藏之助一々申開いた、詰り十八ヶ條に分
 て尋ねたから、これを世に大石十八ヶ條の申開きこいふのだ、十八ヶ條の申開
 きを立派にしてのけたから、内藏之助は一旦細川屋敷へ引取つた、この時公儀
 ではイロく評定があつて、助命の沙汰が然るべしこいふ説が多数を占めたが
 水戸公が切腹然るべしこ唱へて、遂にこの説が行はれ、義士四十六人には切腹
 申し付けることになり、イヨく翌年二月四日に四家へ上使が立つた、四十六
 人は兼て覺悟の身の上であるから、平氣の平左、一同は潔よく此處に切腹を遂
 げた、今その辭世を列記して見るこ、
 大石良雄の分は
 水に映る花や藻屑に浮かへて

散しを恨む庭の梅ヶ枝

大石良金は

極樂の道は一筋君ごもに

阿彌陀をそへて四十八人

原惣右衛門は

かねてより君ご母ごに知らせんこ

人より先きに死出の山道

木村岡右衛門は

思ひきや我武士の道ならで

かゝる御法の道に逢ふこは

間喜兵衛は

思ひなく生過ぎたりこ思ひしに

潮田又之亟は

今里へ行く老の樂み

武士の道ごばかりを一筋に

思ひ立ちぬる死出の旅路に

小野寺十内は

迷はじな子と共に行く後の世は

人の暗きも春の夜の月

横川勘平は

待て暫し死出に遅くはあらねども

我れ魁けに道しるべせん

早見藤左衛門は

地水火風空の内より出し身の

神崎與五郎は

ただらで歸る元の住家に

人の身の道の分すば遅くとも

消へる雪にも踏み迷ふべき

富森助右衛門は

先立ちし人はありけり今日の日は

遂に旅路を思ひ出にして

村松喜兵衛は

草枕むすべ假寢の夢さめて

所に變る春のあけほの

武林唯七は

仕合せや死出の旅路の花の頃

茅野和助は

魂や風にはなるゝ風

大高源吾は

梅で飲む茶屋はありけり死出の山

岡野金右衛門は

其の匂ひ雪のあしたの野梅かな

その他にもあるが煩はしいから此處には、略くここにする、先づ義士銘々傳は十八ヶ條申開きを以つて大團圓を告げることにしやう。

元祿義士銘々傳終

大正八年九月一日印刷
大正八年九月五日發行

定價金七拾錢

著作
所有

著者 雪花山人

大阪市東區博勞町四丁目十三番地

發行者 立川熊次郎

大阪市西區阿波堀裏町十一番地

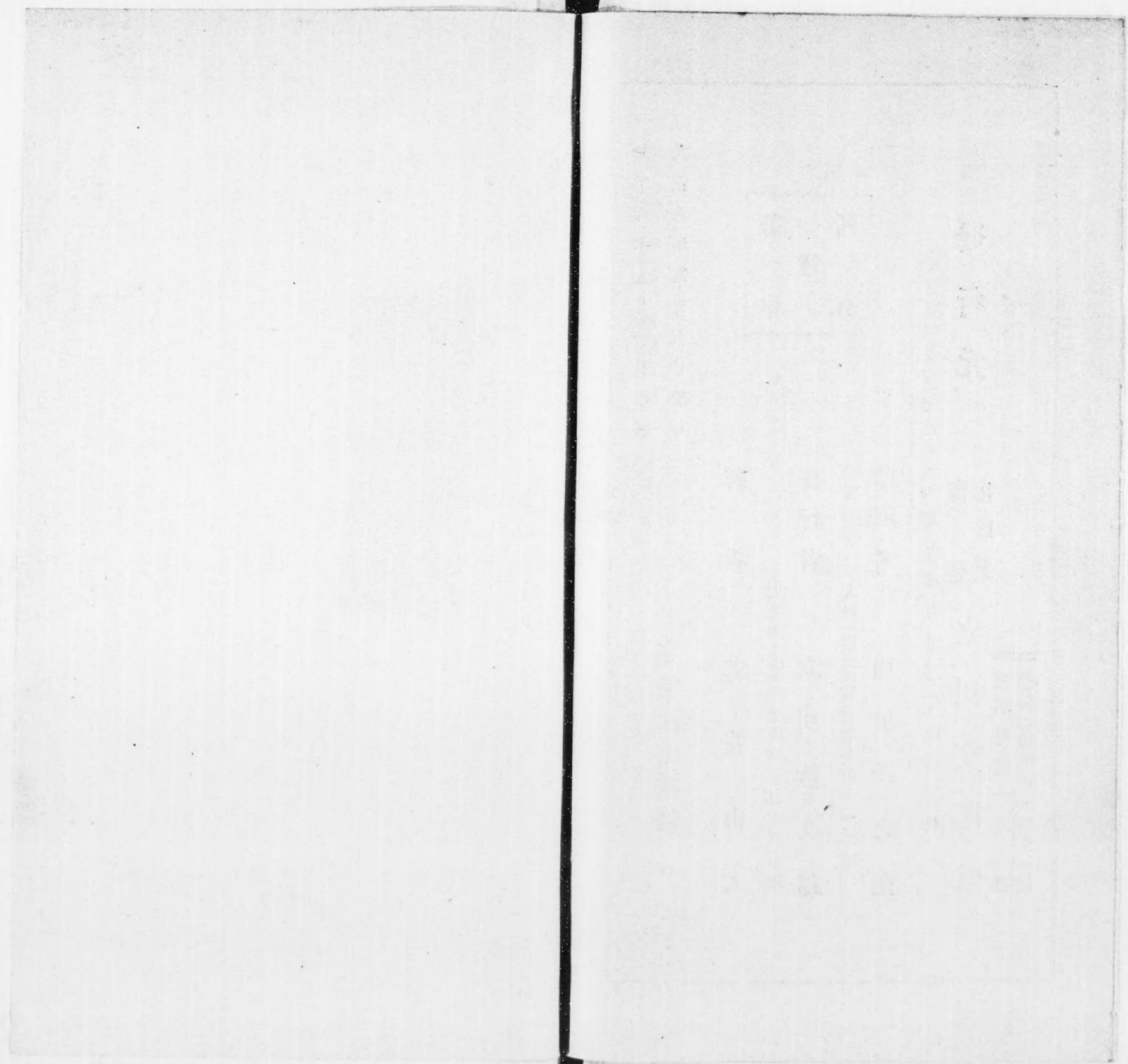
印刷者 山田千之亟

大阪市東區博勞町四丁目

發行元

書業 立川文明堂

電話船場一九四番
振替口座大阪一四六一番



187
297

終

